

# AMDA 年次報告書

2018.4.1 ~ 2019.3.31



西日本豪雨災害被災者緊急支援活動

**AMDA の「平和」の定義**

「今日の家族の生活と明日の家族の希望が実現できる状況」

平和の阻害要因

- 1. 紛争、戦争
- 2. 災害
- 3. 貧困

阻害要因を克服するプログラム

GPSP プログラム  
コンセプト

- ①開かれた相互扶助
- ②パートナーシップ
- ③ローカルイニシアチブ

\*GPSP とは、世界平和パートナーシップ (Global Partnership for Sustainable Peace) の略

GPSP 4 分野

- ・ 平和構築
- ・ 健康増進
- ・ 教育支援
- ・ 生活支援

関連プラットフォーム

- 1. AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォーム



**GPSP プログラム分類表**

平和構築分野	健康増進分野	教育支援分野	生活支援分野
①難民支援事業 a) 緊急支援 b) 復興支援	①プライマリーヘルスケア事業	①グローバル人財育成事業	①有機農業事業
②災害支援事業 a) 緊急支援 b) 復興支援	②医療技術移転事業	②こども食堂プラットフォーム事業	②その他
③災害対応プラットフォーム a) 南海トラフ災害対応プラットフォーム b) 災害鍼灸	③医療支援事業	③奨学金事業	
④ GPSP 魂と医療のプログラム	④友好病院事業		

**\* プライマリーヘルスケア (AMDA の考える定義) :**  
 貧困の環境下での健康増進を目的とし、以下 3 種類の活動を含むものが望ましい。  
 ①住民参加  
 ②知識を広める活動  
 ③社会的及び経済的改善に向けての活動

# 平和構築

## 難民支援事業

### 緊急支援



#### ■バングラデシュ・ロヒンギャ難民 医療支援活動

◇実施場所 バングラデシュ・コックスバザール県 ウキヤ地区クトウパロン難民キャンプ

◇実施期間 2017年10月～2018年11月

◇派遣者（2018年度、派遣順）

吉井健哲／医師／AMDA 緊急救援ネットワーク登録メンバー、橋本千明／看護師・調整員／AMDA 本部職員、ミラ・カルダ／医師／AMDA ネパール支部、河内順／医師／NPO 法人 TMAT・湘南鎌倉総合病院 副院長、鈴木裕之／医師／NPO 法人 TMAT・福岡徳洲会病院

◇現地での参加者を含めた事業チーム構成

AMDA 本部、AMDA バングラデシュ支部、日本バングラデシュ友好病院、AMDA ネパール支部、NPO 法人 TMAT

◇受益者数（2018年度）延べ22,418人、全実施期間：延べ38,438人

◇受益者の声

「クリニックを継続してほしい。AMDA 診療所にくると安心する。スタッフが皆素晴らしい人。」

◇事業内容

2017年8月25日にミャンマーで武力衝突が発生し、イスラム系少数民族・ロヒンギャ難民が大量にバングラデシュに逃れた。2017年9月、AMDA バングラデシュ支部がニーズ調査を実施。難民キャンプに救援物資や安全な飲料水、食料、住環境、医療サービスが不足していることが判明し、AMDA は1年間の期間限定で支援を行うことを決定した。

2017年10月、AMDA はAMDA バングラデシュ支部・日本バングラデシュ友好病院と協力して活動を開始、ロヒンギャ難民キャンプ最大のクトウパロン難民キャンプに診療所を開設した。AMDA バングラデシュ支部より医療チームとして継続的に医師2人を含む8人程度を派遣しながら、週6日診療と医薬品提供を実施。1日平均

120人の患者の診察を行った。また、空き時間を使って助産師が妊婦健診、出産後の経過観察を実施した。

2018年度も引き続き、AMDA 多国籍医師団として日本・ネパールより医療者を派遣した。日本のAMDA 本部は医師4人と本部職員1人を派遣した。そのうちNPO 法人 TMAT とは合同事業とし、2018年11月に医師2人を派遣した。NPO 法人 TMAT との合同事業は2016年のハイチハリケーン緊急救援、2018年のインドネシア・スラウェシ島地震緊急支援活動に続き、3度目である。AMDA ネパール支部は医師1人を派遣した。

活動にあたって、国内外から多くのご寄付を頂いた。バングラデシュでの国内協力として、バングラデシュ・ユナイテッド・コマーシャル・バンク (United Commercial Bank : UCB) が今年度も引き続き継続的に支援を下さった。UCB 会長アニスザマン氏 (Mr. Anisuzzaman Chowdhury Ronny) は支援の動機について、1971年のバングラデシュ独立戦争時の自身の経験と重なったからと語った。何も持たず国を追われ、国籍がなく行き場のないロヒンギャ難民の姿は、幼い頃の自分の姿であり育った国は違っても同じベンガル人として何もしないという選択肢はなく、苦境にある難民に心を寄せたいという思いが1年にわたる継続支援に繋がったと話した。

受益者の難民からは、「生まれ育った国を追われたことは悲しくつらかった。電気をつけることもできず息をひそめて真っ暗な中で暮らさなければならなかった。今は光の中、電気がついた中で襲われる危険がなく過ごせることはとてもありがたい。しかし、いつかはミャンマーで安心して暮らせることが自分にとっての真の幸せだ。」「キャンプの暮らしは楽ではない。何もすることがない、仕事がないことが最も苦しい。しかし、安全が保障されない今のミャンマーには帰りたくとも帰れない。」と複雑な心境を語った。

難民キャンプにおいては、物資や医療、衛生面は徐々に整ってきており、緊急期から、長期の生活を見据えた

## 難民支援事業

### 復興支援

支援の段階へと移行したことから、AMDAは2018年11月をもって医療支援活動を終了した。

2017年10月から2018年11月末までの約1年間で延べ4万人弱の患者を診療した。

#### ■ミャンマー国内避難民医療支援活動

##### ◇実施場所

ミャンマー・ラカイン州シットウェイ避難民キャンプ

##### ◇実施時期

2019年開始調整中

##### ◇派遣者

菅波茂／医師／AMDA インターナショナル代表、難波妙／調整員／AMDA GPSP 支援局長

##### ◇現地での参加者を含めた事業チーム構成

AMDA 本部、CRR（ラカイン復興委員会）

##### ◇事業内容

AMDAはAMDAバングラデシュ支部・日本バングラデシュ友好病院と協力し、2017年8月にミャンマーからバングラデシュに移動したイスラム系少数民族・ロヒンギャ難民に対し同年10月より1年間、医療支援活動を実施した。同時に、AMDAはミャンマー国内にいる仏教徒の国内避難民に対しても支援活動の実施を決定した。

活動決定に際し、菅波代表と難波調整員は2019年2月ミャンマーに渡航、既にラカイン州にある国内避難民キャンプに避難してきている仏教徒に対して支援活動を行っているCRR（ラカイン復興委員会）と協議を行った。その結果、AMDAはCRRと協力し、キャンプに住む助産師への支援を行うことを決定、3月より以下の内容で活動を行う予定である。

1. 仏教徒の国内避難民のキャンプにてCRRが所有しているヘルスポストに助産師を派遣。
2. ヘルスポスト内の医療設備の整備。
3. キャンプ内で出産する母と子の支援。（病院への紹介まで含む）
4. 3か月に一度のレポート提出。



#### ■ネパール・ブータン難民医療支援活動

◇実施場所（2018年度）ネパール・ジャパ郡、モラン郡内難民キャンプ及びAMDAダマック病院

◇実施期間 1992年～継続中

◇現地での参加者を含めた事業チーム構成  
AMDAネパール支部

◇受益者数（2018年度）延べ6,633人



##### ◇事業内容

1990年代にブータン内で民族間紛争が拡大、多くのネパール系ブータン人がネパール国内の難民キャンプに移住した。1992年、AMDAネパール支部はジャパ郡ダマック市でこの難民に対する医療支援事業を開始。3年後にはUNHCR（国連難民高等弁務官事務所）より正式な委託業務となりAMDAが本格的に主導、「AMDAダマック病院」でブータン難民及び地域住民への医療サービスの提供を開始した。

2001年、同支部はブータン難民キャンプでの一次保健医療をUNHCRから委託され、各キャンプに活動拠点を設置、最大約11万人の難民を対象にプライマリヘルスケアサービス（一次診療サービスのほか、妊婦健診、HIV/AIDS対応、公衆衛生、栄養補助食料の供給等）を実施してきた。

現在難民人口も当時の約1割に減少しており、ネパール政府とUNHCRはキャンプ内での活動について協議を重ね、AMDAネパール支部が委託された事業のうち、一次診療サービス及びHIV/AIDS対応については2018年12月に終了した。ただし終了を前に、AMDAネパール支部とUNHCRの働きかけもあり、同年5月、難民の方々がキャンプ外の医療機関で医療サービスを受けるための国民健康保険が整備された。

AMDAダマック病院は、引き続き二次医療機関として、キャンプ内外の一次医療機関からの搬送などを受け入れている。

## ■スリランカ平和構築プログラム

◇実施場所 スリランカ・ポロンナルワ

◇実施期間 2018年8月3日～5日

◇派遣者 菅波茂／医師／AMDA インターナショナル代表、竹谷和子／調整員／AMDA ボランティアセンター事務局長、三宅孝士／調整員／赤磐市職員（AMDAに出向）、押谷晴美／看護師／AMDA 緊急救援ネットワーク登録メンバー、内田涼／調整員／広島大学大学院インターン

### ◇現地での参加者を含めた事業チーム構成

AMDA 本部、AMDA スリランカ支部、St. John Ambulance、現地参加4校（Royal Central College（ポロンナルワ）、Kaudupelella Sinhala Vidyalaya（マタレー）、Vivekanantha Vidyalayam（キリノッチ）、Muthur Central College（ムトゥール）、岡山県赤磐市（友實武則・赤磐市長及び職員3人）

◇受益者数 111人（スリランカ学生100人、AMDA 中学高校生会メンバー4人、岡山県赤磐市内中学生5人、広島県立福山誠之館高校2人）

### ◇受益者の声

・「民族の違うシンハラ、タミルの生徒の手をとり笑顔になり、一緒に話し友達になった。」



・「言語が伝わらず苦労も多かったが、それ以上にジェスチャーや絵などで分かり合えるということ、笑顔でいるだけで周りの人に伝わり笑顔の輪がすごく広がること、そして自分の意見がなかなか伝わらなくても一生懸命聞いてくれ、それが伝わった時は人の意見を尊重し、言語が伝わらないからこそ、相手を尊重することの大切さを改めて感じる事ができた。」

・「異なる文化や習慣を理解し受け入れることは少し難しいかもしれないが、お互いの考え方や生きてきた歴史を尊重することは、国際貢献に最も大切なことだと思った。」

・「今回のプログラムで、次の平和構築へのステップへ進むためには笑顔だけでは足りないということに気づいた。次のステップのため、自分たちなりの答えを探していきたい。」

・「実際に行って現地の人たちと触れ合うなかで、“自分にとっての平和”とは笑顔だと思った。スリランカは本当の意味での和解はまだできていないけど、人の温かさや笑顔だとスリランカは世界で1番。」

・「他の国との歴史的関係を知り、その国の人たちと関係を深め、交流することも大切だと感じた。」



・「いろんな宗教を通して自分たちの考えだけを通すのではなく、違う考え方も受け入れなければならないと思った。」

・「言語が違ってもお互いが同じように平和について考えたり、宗教が違って仲良くなろうとしたりすると最後は笑顔を共有することができるということが分かった。」

・「笑顔は素晴らしいもので、例え言葉が通じず、分からない時でも笑ったら笑顔で相手も返してくれるそんな魔法の道具だと思った。」

・「この経験を通して、今後もなんらかの形で社会に貢献できる人になりたいと思った。」

・「このプログラムを進める中で言葉が通じず、相手が何を言いたいか理解するのが大変なこともあったが、一生懸命に伝えようとする事が相互理解には必要だということを実地の学生たちから学んだ。」

### ◇事業内容

1983年に勃発したスリランカ内戦が停戦した翌年の2003年より2006年までAMDAは国内3カ所の異なった民族に向けた巡回診療など医療と平和プロジェクトを行った。内戦終了後の2011年からは毎年、異なった宗教、民族の生徒たちが交流するスリランカの「平和構築プログラム」を実施、2013年からは日本からも中学生・高校生が参加している。

2018年はポロンナルワにて国内4つの学校より計100人、そして日本からは「Share our Smile（笑顔を共有）」をスローガンに掲げ、AMDA 中学高校生から4人、岡山県赤磐市の中学生5人、広島県立福山誠之館高校2人が参加。4つの宗教施設（仏教、ヒンズー教、イスラム教、キリスト教）を訪問しお互いの宗教を知り、スポーツプログラムや文化交流などで相互理解を深めた。また、今回「平和について考える」取り組みとして、

①参加者全員が自分で考えた平和について絵を描き話し合う活動

②日本チームからの平和に関するプレゼンテーション

③毎年死者が出ている灌漑用水のため池に設置する、「命を大切に」をテーマにした安全啓発ポスター作りを行った。

今回日本から参加した学生たちは、「言葉が通じなくても相手を理解しようとする態度」や「笑顔で伝わるもの」などを学び、これからの自分たちの将来に生かしたいと

帰国後に語った。

また今回は、市の中学生を派遣した友實武則・岡山県赤磐市長も本プログラムに参加、開催地であるポロナルワ市の市長との交流も実現した。

## 災害支援事業

### 緊急救援

#### ■大阪北部地震被災者緊急支援活動

- ◇実施場所 大阪府高槻市、茨木市
- ◇実施期間 2018年6月18日～19日
- ◇派遣者 大西彰／調整員／AMDA本部職員、神倉裕太郎／調整員／AMDA本部職員
- ◇事業内容

6月18日午前7時58分、大阪北部を震源とするマグニチュード6.1の地震が発生、最大震度6弱を観測した。

同日午後、AMDA本部より調整員2人を派遣し、夕刻に震度6弱を記録した高槻市に入った。同市災害対策本部にて情報収集を行い、避難所となった公民館や小学校を実際に訪れ、避難者全員の帰宅を確認した。

翌日、同じく震度6弱を記録した茨木市危機管理課及び保健医療センターを訪問し、地元医療機関の診療開始を確認。その後、茨木市及び高槻市市内の避難所にて担当者から、既に保健師による巡回健康相談を開始しており、水や食料も十分支給されている状況を確認した。また、避難されている方々が「家に帰れないというより、余震が怖いから避難所にいる。」「余震だけでなく、土砂災害も心配している。」など不安を抱え、この日も避難所に残られる話など調整員が直接避難者より伺い、その後、高槻市災害対策本部内危機管理室にて見聞きした話を含め最終報告を行った。

調整員は医療を含めた支援の必要性はないと判断し、同日午後6時、活動の一旦終了を決定、帰途についた。



#### ■西日本豪雨災害被災者緊急支援活動

- ◇実施場所 岡山県総社市、倉敷市真備町
- ◇実施期間 2018年7月7日～8月31日
- ◇派遣者数 265人（医師11人、看護師39人、薬剤師15人、医療調整員6人、理学療法士1人、保健師12人、鍼灸師40人、心理士1人、弁護士4人、助産師2人、あん摩マッサージ指圧師1人、介護福祉士1人、調整員76人、学生ボランティア43人、AMDA職員13人）
- ◇活動参加・活動地訪問自治体、団体、企業（敬称略）  
自治体（自治体コード順）：岡山県総社市、岡山県赤磐市、徳島県阿南市、徳島県美波町、徳島県海陽町、高知県黒潮町  
医薬品関係（五十音順）：一般社団法人岡山県薬剤師会吉備支部、株式会社幸耀、有限会社アイ薬局  
医療機関（五十音順）：一般社団法人吉備医師会、一般社団法人瀬戸健康管理研究所 SHL 丸亀健診クリニック、医療法人さくら診療所、医療法人サンズあさのクリニック、医療法人社団かとう内科並木通り診療所、医療法人社団時正会佐々総合病院、医療法人高杉会高杉こどもクリニック、医療法人ときわ会藤井クリニック、医療法人芳越会ホウエツ病院、医療法人横浜柏堤会戸塚共立第2病院、株式会社岡山医学検査センター、社会福祉法人旭川荘療育・医療センター、社会福祉法人全仁会倉敷平成病院、独立行政法人国立病院機構福山医療センター、美波町国民健康保険美波病院、モンゴル・ウランバートルエマージェンシーサービス  
教育機関（五十音順）：岡山県立大学、学校法人朝日医療学園朝日医療大学校、学校法人加計学園玉野総合医療専門学校、学校法人ノートルダム清心女子大学、国際医療勉強会 ILOHA、国立大学法人岡山大学 法学部教授黒神直純、モンゴル国立医科大学  
企業・団体（五十音順）：AMDA 沖縄、AMDA 熊本鍼灸チーム、AMDA 兵庫、一般社団法人岡山経済同友会、一般社団法人岡山県鍼灸マッサージ師会、一般社団法人 Bridge for Fukushima、NPO 法人福祉苑リーベの会、岡山倉敷フィリピーノサークル、賀川法律事務所、株式会社インダ工務店、株式会社大塚製薬工場、株式会社廣榮堂、公益財団法人風につライオン基金、公益社団法人岡山県鍼灸師会、清水博文税理士事務所、社会福祉法人倉敷市社会福祉協議会、社会福祉法人総社市社会福祉協議会、十字屋グループ、小規模多機能ホームぶどうの家真備、人道援助宗教 NGO ネットワーク (RNN)、生活協同組合おかやまコープ、生活協同組合コープこうべ、中外製薬株式会社、特定非営利活動法人 AMDA 社会開発機構 (AMDA-MINDS)、特定非営利活動法人リザルツ、日本青年会議所医療部会、有限会社蒲池畜産
- ◇受益者数 延べ5,542人



#### ◇受益者の声

「日中も保健師さんや看護師さんがおられるから安心して過ごせる、家よりもここがいい。」(サンワーク総社)

#### ◇事業内容

##### 【災害急性期(7月7日～9日)】

7月5日より降り続けた雨は激しさを増し、翌日夜には岡山全域で大雨特別警報が発令、県内では堤防の決壊や土砂災害など甚大な被害が発生した。

7日午前11時過ぎ、AMDAは災害協力協定を結んでいる岡山県総社市の災害対策本部に調整員1人を派遣、協議の結果AMDAチームによる市内避難所の巡回診療を決定。同日正午に看護師、調整員各1人も追加派遣。アイ薬局の所有する移動調剤車も到着し、総社市、地元医療機関、AMDA南海トラフ災害対応プラットフォーム協力医療機関のご協力により、医師2人、薬剤師2人、看護師1人、調整員1人から成る医療チームを編成、当時393人が避難していたきびジアリーナで診療活動を開始した。外傷患者2人を含む11人を診察、傷の処置や薬の処方を行った。夕刻にはチームを二手に分け、1チームは別の避難所である昭和小学校に移動し、11人を診察したほか、エコノミー症候群予防の体操を避難者に教えた。

活動開始以来共に活動する総社市や医療機関に加え、8日は岡山県薬剤師会吉備支部等の協力を得ながら、きびジアリーナ避難所に「AMDAきびジアリーナ救護所」を開設。医療チーム(医師4人、薬剤師14人、看護師7人、理学療法士1人、調整員7人)が午後6時まで計83人を診察、内2人は医療機関への救急搬送、38人は薬を処方した。

9日は総社市が、きびジアリーナで過ごす避難者の熱中症の可能性を懸念し、962人全員を市内の冷房設備がある他の避難所へ移動させることを決定。AMDAは移動に向け、同市と協働し避難者を世帯ごとに調査。医療介入の必要な方や要支援者の情報を収集し、各々の状況により移動先の避難所を決定、特に医療介入の必要な方をサンワーク総社に移動させた。同日夜には避難者のほぼ

全員の移動を完了。

##### 【災害亜急性期(7月10日～)】

##### ①サンワーク総社での活動(7月10日～8月15日)

医療介入の必要な避難者と家族をサンワーク総社に移動させた翌日10日より、AMDAから派遣された看護師あるいは保健師、調整員が日中常駐、避難する最大76人の方たちの見守りや声かけなどといった健康支援活動を行った。

##### ②台風12号特別対応

##### ～総社市内避難所を巡回医療相談～(7月29日)

7月29日に台風12号が西日本に接近、総社市では同日早朝に避難勧告が発令。600人以上の方が市内10カ所の避難所に避難した。AMDAは総社市、吉備医師会協力の下、AMDA医師2人と調整員1人が総社市保健師と一緒に丸一日かけて全避難所を巡回し、延べ28人の医療相談に対応した。



上記の活動に並行し、甚大な浸水被害を受けた倉敷市真備町においても支援活動を開始。

##### ③倉敷市真備町内避難所での活動

##### a) 倉敷市立岡田小学校(7月11日～8月15日)

AMDA災害鍼灸チームが中心となり鍼治療やあん摩マッサージ指圧師による施術、足浴などを避難者に提供、活動終了までに延べ964人に施術を行った。当初は自宅の片付けなどによる腰・肩・背中などの痛みの訴えが多かったが、時間の経過とともに便秘や不眠などの訴えが増加。「鍼を受けた夜はよく眠れた。」といった声も聞かれた。鍼治療を受けるだけでなく、小学生から高齢者まで毎日話をしに来られる方も多く、「憩いの場」としても利用された。

##### b) 真備公民館菌分館(7月21日～8月31日)

真備町内の小規模多機能ホーム「ぶどうの家真備」は壊滅的な被害を受け、入居者と職員は他の行先のない避難者の方と真備公民館菌分館で避難生活を余儀なくされた。高齢者も多く、施設スタッフが昼夜を通し見守りや介助が必要な方に対応していたが、疲労が目立ち始めていた。その状況を受け、AMDAは夜勤を中心に担当可能な看護師を派遣した。



#### ④まび記念病院支援活動(7月18日～28日)

倉敷市真備町内の基幹病院である医療法人和陽会まび記念病院は、1階部分がすべて浸水するなど甚大な浸水被害を受けた。地元の方々が一刻も早く医療を受けられるよう病院機能を再開させるべく、吉備医師会、まび記念病院、AMDAの3者が「健診車1台をまび記念病院駐車場に置き診療を再開する」「運営は吉備医師会が主導し他の被災した診療機関の医師も診療可能とする」「保険診療を行う」ことで協力体制を確認。AMDAは岡山県医療推進課、保健所、厚生労働省の許可を得、28日まで一般社団法人瀬戸健康管理研究所より健診車を借り受ける形で保険診療の再開に協力した。この健診車をまび記念病院の付属物とし、18日から3日間の試験的運用を経て診療を開始。この時、AMDAからも医療者及び調整員を派遣した。(同月23日からは吉備医師会とまび記念病院の運営。)

#### ⑤救護所での支援活動

(総社市内2カ所:7月14日～16日、真備公民館岡田分館:8月5日～12日)

総社市・倉敷市社会福祉協議会と協働し、被災者だけでなく、全国から復旧作業のお手伝いに参加したボランティアの方に対しても支援活動を実施。連日35度を超える猛暑の中で作業をされる方々の熱中症や作業中の負傷などに対応すべく、総社市内、倉敷市真備町内に設置された救護所に看護師などを派遣。延べ11日間の活動で77人の患者に対応した。水分補給やこまめな休憩の呼びかけや、スポーツドリンクなどの配布を行い、熱中症予防も行った。

災害の急性期を過ぎたため、真備公民館菌分館以外の緊急支援活動は8月15日をもって終了、菌分館も同月31日に終了した。

今回の活動には、AMDA緊急救援ネットワーク登録メンバーやAMDA災害鍼灸チーム、地元ボランティア他、岡山県、香川県、高知県、徳島県のAMDA南海トラフ災害対応プラットフォーム協力自治体・医療機関より医療関係者や調整員が、岡山県下の大学・専門学校などか

らも多くの学生が参加、被災地やAMDA本部で活動した。また、モンゴル人医師2人が医療調整員として参加した。

#### \*西日本豪雨災害活動の経過報告と感謝の集い(中止)

9月30日、本緊急支援活動について関係者、派遣者、その他ご協力いただいた方々にご報告及び「感謝の集い」を岡山県総社市で開催する予定で準備を進め、当日100人以上が出席予定だったが、台風24号の接近に伴い27日に中止を決定。

### ■インドネシア・ロンボク島地震 緊急医療支援活動

◇実施場所 インドネシア・ロンボク島

◇実施期間 2018年8月1日～17日

◇派遣者

菅波茂/医師/AMDAインターナショナル代表

◇現地での参加者を含めた事業チーム構成

AMDA本部、AMDAインドネシア支部

◇受益者数 延べ228人

◇インドネシアからの参加者の声

「病院勤務ではできない非常に貴重な経験ができた。」



#### ◇事業内容

7月29日、インドネシア・ロンボク島を震源とするマグニチュード(M)6.4の地震を受け、AMDAインドネシア支部は8月1日、医師2人、AMSA(アジア医学生連絡協議会)1人を含む医療チームを派遣、センバルン(Sembalun)村に入りニーズ調査の後、被災者に巡回診療を実施したほか、古着を提供するなどの支援を行った。

そして彼らが活動していた同月5日夜、同島でM7.0の地震が発生。発生直後、津波が来るかもしれないという噂で住民が混乱する場面があったが、医療チームは周辺の方々に安心感を与えるような声かけを行った。翌日からはマタラム(Mataram)州の病院へ向かい、同病院の外科手術に麻酔科医として参加、3日間で約30人の手術に携わった。



甚大な被害状況を受け、同支部は2次派遣を決定。手術協力等のニーズを考え、1次チームと交代で麻酔科医3人とAMSA1人を7日に派遣した。2次チームの一部は病院での手術協力に参加した。麻酔科医1人は参加した手術中にM6.2の余震が発生した。周りの職員が病院の外へ避難する中、自身は手術中で患者を一人置いていけない状況で、「病院が無事であるようにと祈るしかなかった」と語った。そのほか、避難所での診療も実施。妊婦の緊急搬送にかかわりAMDAチームが救急車に同乗し、無事病院で出産に至ったというケースもあった。

また、16日に菅波茂AMDAインターナショナル代表とアンディ・フスニ・タンラAMDAインドネシア支部長がチームと合流、食料や飲料などを現地自治体に支援した。

今回の地震により死者が460人以上、7,000人以上が負傷した。



ラ州政府より発表されていたため、予防目的で抗生剤も処方された。

また、現地団体チェンガヌールロータリークラブのご協力の下、事前調査を実施、「洪水によりほとんどの世帯で食器が流された」という現地情報を基に地元特有の調理器具などを4村198世帯に配布。住民の方々と一緒に支援物資を選んだため、ニーズに合致した物資の調達と配付を行うことができた。加えて高等学校に通う生徒のうち、被災した生徒50人に対して学校カバンとノート5冊を配布した。

この災害で多くの家が1階や2階まで浸水したが、被災者は、地元警察や漁師を中心としたチームに救助され、近くの学校、宗教施設、公会堂などに避難することができた。救助活動に参加した漁師は「スマトラの津波に遭ったころは、自分がまだ小学生だったから何もできなかった。ただ、支援を受けたことは理解していた。自分の村でも津波で10人が亡くなるという悲しい思いをしたが、色々な方の支援で復興してきた。今回、自分たちに何かできると分かった時、是非人々を助けたいと思った。」と語った。

## ■北海道胆振東部地震被災者緊急支援活動

◇実施場所 北海道厚真町

◇実施期間 2018年9月7日～29日

◇派遣者(派遣順) 大西彰/調整員/AMDA本部職員、三宅孝士/理学療法士・調整員/赤磐市職員(AMDA本部に出向中)、竹内洋二/調整員/AMDA支援農場グループ代表、木口良交/調整員/AMDA支援農場グループ、木口弘之/調整員/AMDA支援農場グループ、坪井勇/調整員/AMDA支援農場グループ、横田晃枝/調整員/AMDA支援農場グループ、山河城春/看護師/AMDA緊急救援ネットワーク登録メンバー、竹内美妃/看護師/AMDA緊急救援ネットワーク登録メンバー、鈴記好博/医療調整員・医師/徳島大学大学院総合診療医学分野、藤田美樹/看護師/AMDA緊急救援ネット

## ■インド連邦・ケララ州洪水被災者緊急支援活動

◇実施場所 インド連邦・ケララ州、カルナタカ州

◇実施期間 2018年8月25日～9月8日

◇派遣者(派遣順) 岩尾智子/看護師(米国資格)・調整員/AMDA本部職員、松永健太郎/調整員/元AMDA職員

◇現地での参加者を含めた事業チーム構成

AMDA本部、AMDAインド支部、AMDAネパール支部、チェンガヌールロータリークラブ、セワ・バラティ(Sewa Bharati)

◇受益者数 医療支援:延べ566人、

調理器具・食器配布:198世帯、文具セット:50人

◇受益者の声

「ケララ州のこのあたりでは、『プッティ』と呼ばれる、この地方独特の小さな蒸しパンのような食べ物があるが、それを作る調理器具も洪水で流されたので、当分作れないと思っていた。しかし、AMDAからプッティを作る調理器具も支援してもらえてうれしい。プッティ、食べてみて。」

◇事業内容

8月初旬より降り続いた南西モンスーンによる豪雨により、インド連邦南端のケララ州と近隣州では100年に1度と言われる大規模洪水と地すべりが発生。特にケララ州内全14県が被災、死者が503人、540万人以上が被災した。

AMDAは8月25日から9月8日まで、インド、ネパール、日本のメンバー計11人からなる多国籍医療医師団を結成し、現地協力団体セワ・バラティとともにケララ州アルプザ県とカルナタカ州コダグ県で医療支援を実施。風邪の症状、皮膚の掻痒感、家の片付けによると思われる腰痛が主な症状で、加えてレプトスピラ症の発生がケラ



ワーク登録メンバー

◇受益者数 延べ 880 人以上

◇派遣者の声

「現地で活動する医療団体や自治体との情報共有、連携の重要性を感じた。自治体職員が疲労困憊する中、AMDA が見回り活動などで避難者の状況をよりよく理解し、関係者に継げることが大事な活動となった。」

◇事業内容

9月6日未明、北海道胆振地方中東部を震源とするマグニチュード (M) 6.7 の地震が発生、北海道で最大震度 7 を観測した。死者 41 人、北海道全域が停電し、6,000 人弱の方が一時期避難生活を余儀なくされた。

この被害状況を受け、翌日被災者訪問及びニーズ調査のために AMDA 本部より調整員 2 人を派遣。また、これまでも被災地を「食」の面で支えてきた AMDA 支援農場グループが、今回の地震の被災状況を受け、炊き出しチームとして支援者からのお米などを持参し 7 日夜に岡山を出発、車で 9 日未明に北海道入りした。甚大な被害を受けた厚真町の避難所の一つである厚真町スポーツセンターにて AMDA 調整員 2 人と合流し、9 日夕食から 10 日夕食まで炊き出しを延べ 730 人の被災者に提供した。2 日目には炊き出しチームと調整員だけでなく避難者も調理に参加、翌日より炊き出しがないことを知ると「明日から私が作ろうかな。」という避難者の前向きな姿を窺うことができた。

その後、避難所対応をする保健師が疲弊している状況を受け、活動終了まで医療調整員 1 人、看護師 3 人が避難所となっていた厚真中央小学校にて夜間を中心に、最大 150 人の避難者の体調管理や見守りを実施した。避難されている方からは、地震発生から時間が経過しても未だに続く余震への恐怖などを訴える人も多かった。また、先祖代々から受け継いだ実家を失い喪失感を感じる高齢の避難者のお話や、家を失った方々がこれから新し

い土地で町営の集団住宅に住まうことに不安を抱えているという話なども聞かれた。一方、派遣者たちは、家族を亡くした避難者、上記のような不安を抱えた避難者の話を聞くことにより精神的サポートとなったのでは、と話した。

AMDA は避難所運営を行う北海道庁及び厚真町職員にも落ち着きを取り戻しつつある状況、更に他県からの保健師及び職員も入ってきたことを確認の上、地元の理解をもって 9 月 29 日に本活動を終了した。

## ■フィリピン災害被災者に対する支援活動

◇実施場所 フィリピン・ルソン島ベンゲット州、パンガシナン州、セブ島ナガ市

◇実施期間 2018 年 9 月 26 日～ 10 月 4 日

◇派遣者 神倉裕太郎／調整員／AMDA 本部職員

◇現地での参加者を含めた事業チーム構成

AMDA 本部、フィリピン大統領府、フィリピン空軍、フィリピン海軍

◇受益者数 延べ 1,014 世帯

◇受益者の声

- ・「まだ行方不明者がたくさんいて、まだまだ元の生活には戻れない。金採掘が盛んなこの地域ではあるが、土砂災害のため採掘が禁止されて仕事なくなった。こんな支援をしてくれたのは AMDA が初めて。ありがとう。」
- ・「避難所生活がいつまで続くか分からなくて、多くの人が疲れている中、このような支援はありがたい。」



◇事業内容

9 月 15 日に台風 22 号がフィリピン・ルソン島北部に上陸し、複数の地域で土砂崩れや洪水が発生、88 人の死者、50 万世帯 200 万人以上が被災した。その 5 日後には同国セブ島ナガ市でモンスーンによる豪雨から地すべりが発生、死者は 72 人、1,500 世帯 6,000 人以上が被災し、当時市内 10 ヲ所の避難所で避難生活を余儀なくされている人たちもいた。当時フィリピン大統領府官房長官上級秘書であり海軍予備役であるメルカド氏含む複数の現地協力者より協力要請を受け、現地との調整の

末、AMDA 本部より調整員 1 人を派遣した。

9 月 26 日夜にフィリピン入りした神倉調整員は翌日、支援活動についてメルカド氏と協議を行い、その後台風による被害の大きいルソン島ベンゲット州で食料及び医薬品支援を実施。支援に入った町の主要産業は鉱業、今回の土砂災害により採掘が禁止され多くの方が職を失うなど、将来に不安を抱える状況下の中での支援に感謝の声をいただいた。同島パンガシナン州では、地元協力者のご提案により被災した家の修理に使用するための屋根板を支援。屋根が崩れたまま住んでいる家庭もあり、「これで家を修理できる。」と話された。

30 日には甚大な地すべり被害に見舞われたセブ島ナガ市等へ移動。避難者がいつ自宅に戻れるかは目処が立っていない状況を受け、食料に加えて石鹸やトイレットペーパーなどの生活物資を配布した。

尚、この支援については物資調達から配布まで、大統領府職員やフィリピン空軍及びフィリピン海軍、地元協力者の協力を得ることで実施することができた。

\*備考：2017 年 11 月 27 日、フィリピンのマラカニアン宮殿にてフィリピン大統領府と AMDA は、フィリピン、日本、または他国における災害時の支援等を始めとする協力協定を締結。今回の活動もこの協力協定のもと実施した。

## ■インドネシア・スラウェシ島地震 被災者緊急支援活動

◇実施場所 インドネシア・スラウェシ島パル市

◇実施期間 2018 年 10 月 1 日～11 月 26 日

◇派遣者（派遣順） 米田恭子／看護師・調整員／AMDA 緊急救援ネットワーク登録メンバー、岩元祐太／医師／AMDA 緊急救援ネットワーク登録メンバー、山崎秀明／看護師／AMDA 緊急救援ネットワーク登録メンバー

◇現地での参加者を含めた事業チーム構成

AMDA 本部、AMDA インドネシア支部、ハサヌディン大学、ムスリム大学、NPO 法人 TMAT、現地協力団体アルテリア

◇受益者数 延べ 600 人以上

◇受益者の声

「日本から来た医療者に診てもらえて、とても嬉しい。」

◇派遣者の声

「今回のインドネシアと日本の合同医療チームとしての活動にあたり、日本の高い医療の質を現地医療者に共有し、日本のチームも現地の医療者のやり方を参考に、より現地に即した診察・処置を行うなど、お互いの医療・看護技術の共有などが出来、非常に有益な機会にもなった。」



### ◇事業内容

9 月 28 日に北スラウェシ島ミナハサ半島を中心に 10 回以上の地震が頻発、そのうち最大の地震はマグニチュード (M)7.4、結果として 3 メートルの津波が同半島パル市などを襲った。死者は 2,256 人、行方不明者 1,309 人、負傷者数 4,612 人、そして 22 万人以上の方が避難生活を余儀なくされる事態となった。

AMDA は地震発生直後から、AMDA インドネシア支部と緊急支援活動に向け調整を開始。被災地近くの空港の被害も大きく、航空機の離着陸が制限されていたため、10 月 1 日、同支部より医師 2 人、調整員として医学生 2 人が第 1 次チームとしてパル市に向け船で出発、27 時間かけ現地入りし、市内にある病院にて麻酔科医として整形外科手術に参加するなど医療支援を行った。

その後、AMDA も日本から医師 1 人、看護師 2 人を派遣することを決定。6 日に日本を出発し、翌日にスラウェシ島マカッサル市に到着した 3 人はインドネシア支部長アンディ・フスニ・タンラ医師と協議を行った。その結果、看護師 1 人は同支部で調整を、他 2 人は同日パル市に移動、AMDA インドネシア支部チームと合流した。合同チームは市内複数の村を訪問しニーズ調査を実施、村全体の建物が倒壊し居住者がいない村、橋が崩落している現場や液状化した村など、改めて地震・津波被害の大きさを目の当たりにした。その後、現地協力団体アルテリアの協力の下、市内にある病院で手術協力をするほか、複数の避難所を回り診療を実施。被災後病院に行けなかった負傷者を見つけ処置を行うことができた。

10 日には、更に医師 3 人、調整員 3 人から成る第 2 次チームが浄水器、発電機、医薬品、水、テントなどを車に積み込んでインドネシア支部を出発。第 1 次チームと合流し、食料や物資の配布、更に避難所キャンプにトイレと調理場を設置するなど多岐にわたる支援を行った。日本からの医療チームは 16 日に帰国、その後 AMDA インドネシア支部チームも被災地での悪天候などにより活動を中止した。

しかしながら、AMDA インドネシア支部は被災者の

PTSD(心的外傷後ストレス障害)を危惧し、11月22日よりAMDA インドネシア支部長を始めとする第3次チーム13人を派遣、被災地内の学校やモスクなどで心のケアを中心に活動を行った。

尚、今回はNPO法人TMATと、2017年ハイチ・ハリケーン被災者緊急医療支援に続き、2度目となる合同医療支援活動を実施。TMATからの医療チームは10月4日に現地では現地医師及びAMDAチームと合流、負傷者の診療補助など医療支援活動を実施した。

## ■ハイチ地震被災者支援活動

- ◇実施場所 ハイチ・グロスモーン
- ◇実施期間 2018年10月12日～13日
- ◇現地での参加者を含めた事業チーム構成  
AMDA ハイチ支部
- ◇受益者数 延べ200人
- ◇事業内容

現地時間10月6日午前8時11分、ハイチ北西部沖を震源とするマグニチュード(M)5.9の地震が発生。死者17人、427人が負傷した。また、7,783世帯の家屋が全壊あるいは一部損壊するなど被害も甚大であった。

AMDA本部は地震発生後からAMDAハイチ支部と連絡を取り情報収集と協議を行っていた。12日、同支部よりマック・ケビン・フレドリック支部長を含む7人が被害の大きかったグロスモーン(Gros Morne)に向け出発、翌日にはグロスモーン地域管理局と面会のうえ、被災者の方々200人に水や牛乳、パスタなどの食料品とおむつや生理用品、そして医薬品を配布した。今回の支援物資を喜んで受け取られていたが、被災者の中には、家が損壊してしまい夜は道路で睡眠をとっている人、毎日食べ物を手に入れることができず食料不足に悩む人なども見られた。

チームは同日、被災地内の病院を訪問し、多くの被災者は近隣の病院に既に搬送されたことを確認した。



## ■スリランカ洪水被災者緊急支援活動

- ◇実施場所 スリランカ・キリノッチ県、ジャフナ県
- ◇実施期間 2018年12月24日～2019年1月6日
- ◇派遣者 山崎秀明/看護師/AMDA緊急救援ネットワーク登録メンバー
- ◇現地での参加者を含めた事業チーム構成  
AMDA本部、AMDAスリランカ支部、セント・ジョン救急サービス(St. John Ambulance Sri Lanka)
- ◇受益者数 延べ615人
- ◇派遣者の声

「活動したキリノッチ県は、AMDA平和構築プログラムの関係のある地域で、1983年から26年間のスリランカ内戦により負傷した方もいる中で被災され、身体的、心理的にもダメージが大きいなど、事前の情報があったため、被災者へのケアに繋がったことが良かった。」



### ◇事業内容

発達した低気圧の影響で12月19日から降り続いた大雨により、同月21日から22日にかけてスリランカ北部州にある5県で洪水が発生。死者2人、被災者は約12万人に上り、最大39か所の避難所に、多い時で約1万人が避難した。

24日にはAMDAスリランカ支部は洪水が発生した北部州のキリノッチに、協力団体であるセント・ジョン救急サービスとの第1次合同チームを派遣し情報収集を開始。現地の避難所を回り、ビスケットやインスタント麺、水などの食料や床用マットの物資を配布したほか、医療支援を行った。

また、AMDA本部も同支部より要請を受け、27日、日本から看護師1人を現地に派遣した。セント・ジョン救急サービスと第2次チームとしてキリノッチ県に入り、第1次チームのニーズ調査情報をもとに購入した蚊帳、靴、学用品、救急箱などの支援物資を配布した。この時、靴などはサイズと必要数量など、学用品も必要なものを授業開始日の前日までに揃えるなど、具体的なニーズを把握した上で必要な子どもたちに配布できたことにこの時派遣した山崎看護師は感銘を受けた。

1月2日からは、AMDA単独で地元保健所と協力して



被災者健康相談などの支援活動を継続。更に5日には、同じく洪水被害のあったジャフナ県に移動し、一緒に活動を行ったセント・ジョン救急サービスのジャフナ支部や同県内にある孤児院を訪問、救急箱や学用品を配布した。

山崎看護師は帰国後、「死者数が2人だったことは、洪水発生直後から、スリランカ政府が住民を避難させ、避難後に徐々にダムの水を放水していったことなど洪水対応が的確だったためだと思う。病院も、洪水直後より巡回診療を開始するなど組織的な活動を実施し、普段から避難訓練を行うなど市民レベルでの意識の高さ、支援者・被災者間の距離の近さによるニーズ把握の正確さを感じた。」と感想を述べた。

## ■インドネシア津波被災者緊急支援活動

- ◇実施場所 インドネシア・ジャワ島バンテン州
- ◇実施期間 2018年12月24日～2019年1月2日
- ◇派遣者 神倉裕太郎／調整員／AMDA本部職員
- ◇現地での参加者を含めた事業チーム構成  
AMDA本部、AMDAインドネシア支部
- ◇受益者数  
延べ1,084人(医療支援:89人、物資支援:995人)
- ◇受益者の声

「かかりつけのクリニックが津波により被災、休診して困っていたが、今回診療してもらい非常に助かった。村まで来てくれて嬉しい。」

### ◇事業内容

12月22日にインドネシアのジャワ島及びスマトラ島にて津波が起き、400人以上が亡くなり、9,000人以上が負傷、16,000もの人たちが避難生活を余儀なくされる事態となった。この甚大な被害を鑑み、AMDAは緊急支援活動を開始。まず24日にはAMDAインドネシア支部から医師2人、看護師1人、医学生1人から成る医療チームを、津波被害の大きいジャワ島バンテン州に派遣、特に甚大な被害を受けた村々でニーズ調査を実施し、医師による健康診断及び食料支援を開始した。

同時にAMDA本部からも調整員1人の派遣を決定、26日に神倉調整員は日本を出発し、翌日被災地で活動するAMDAインドネシア支部チームと合流した。合流後は同州パンデグララン県に置かれていたバンテン州防災局の災害対策本部及びパンデグララン県の保健局を訪ね、地元自治体により必要な支援が行き届いていることを確認した。AMDAチームは同県の医療支援を統括する保健局の医療チームとして登録の上、海沿いの地域を中心に巡回診療を実施。この活動の中で、津波で流れてきたであろう瓦礫などで足を怪我されている方や高齢の方、かかりつけの病院が休診しているなどの理由からクリニック

に行くのが困難な方々を診察、治療することができた。更に、深刻な疾患の疑いをもつ子どもを見つけ出し、近くの小児科のあるクリニックを紹介することもできた。

また、津波被害を直接受けなかった地域でも、日本でいうシャッター街のように商店がほとんど閉まっていて食べ物が手に入りにくい状況であったため、パンなどの食料や、蚊帳やオムツなどの生活物資も支援をした。

1日に被災地での活動を終え、チームは翌日AMDAインドネシア支部があるマカッサルに戻った。その後帰国した神倉調整員は、「支援中は笑顔で被災者に接し、子どもも笑えば親も笑い、被災者全体の気持ちも明るくなることに気付いた。」と心のケアの重要性も併せて報告した。

## 災害支援事業

### 復興救援

## ■東日本大震災復興支援活動

- ◇実施場所 岩手県上閉伊郡大槌町
- ◇実施期間 2011年3月12日～継続中
- ◇派遣者(2018年度) 12人
- ◇受益者数(2018年度) 延べ2,293人
- ◇受益者の声

「昔からの気心の知れた仲間がここに来て世間話をしたり、お互いにアイデアを出し合って作品が出来上がる楽しみがある。」(AMDA大槌健康サポートセンターの教室の生徒さんより)

### ◇現地協力団体

AMDA大槌健康サポートセンター、一般社団法人Tsubomi、復興グルメF-1大会運営事務局、NPO法人仙台夜まわりグループ

### ◇事業内容

2011年3月11日に東北地方太平洋沖を震源とするマグニチュード9.0の地震が発生、更に津波による甚大

な被害をもたらした。8年経った3月、主な活動地である大槌町では、津波被害で不通となっていた三陸鉄道が全線再開した。しかしながら、若者の流出が続いている状況にある。

#### ◆医療・健康支援

2011年12月以降、AMDA大槌健康サポートセンターにおいて、地域の人が集え、心身共に健康になることを目的として教室事業を継続中。郷土料理、体操、木工、さをり織りなどの教室を通し、健康増進、地域の食文化を受け継いでいくことやコミュニティづくりの場となっている。

また、2016年に設立、翌年に一般社団法人化したTsubomiは、子育て世代の居場所を作るべく、わらべうたベビーマッサージサロンや、親子スポーツ教室、ペアレントトレーニング講座等を開催、親子同士の交流や子育ての学びの場となっている。様々な料理教室も実施、岩手三陸の海・山の自然も取り入れながら食生活を見直す機会となった。アロマやボタニカル講座や岩手に伝わる風習を今風にアレンジしたしめ縄づくりを行うなど、若い世代への岩手の伝統継承にも力を入れた。尚、Tsubomiは設立時より一部事業をAMDAの委託事業として行っていたが、2018年度をもってこの委託契約は終了した。

#### ◆生活・自立支援

毎年、地域活性化を目的として行われている「復興グルメF-1大会」は、2018年9月2日に宮城県南三陸町で予定され、AMDAはボランティアバスを運行の予定だったが、西日本各地で豪雨災害が起き、今年度は中止となった。

また、東日本大震災後2013年より、路上での生活を余儀なくされている人々に対し米を贈る活動については、AMDAの呼びかけに賛同した個人農家等から米を提供してもらい、現地で炊き出し等を行っているNPO法人仙台夜まわりグループに送った。今年度は約660kgの米を支援した。



## ■ネパール地震復興支援活動 「障がい者支援プロジェクト」

◇実施場所 ネパール・カトマンズ郡、ラリトプール郡、バクタプール郡、ドラカ郡

◇実施期間 2015年6月～継続中、第四期：2018年6月15日～2019年3月10日

◇派遣者

西嶋望／理学療法士／AMDA委託（ネパール在住）

◇受益者（2018年度）延べ625人

◇現地協力団体

自立生活センターラリトプール（Independent Living Center Lalitpur, 以下ILCL）

◇受益者の声

- ・「うちではベッドから出たことがなかったが、自分の事を自分でできるようになった。」
- ・「4、5年ぶりに家から外に出る機会になった。自立生活プログラムに参加して、どうやって自立生活ができるかも分かった。そして沢山の友達も出来た。」



◇事業内容

2015年4月25日にネパール中部を震源とするマグニチュード(M)7.8の大地震と余震により甚大な被害を受けた。AMDAは発生直後からAMDAネパール支部と協議し、日本だけでなくAMDAカンボジア支部、インド支部、バングラデシュ支部、カナダ支部、フィリピン支部からも医師らと多国籍医師団を構成し、緊急医療支援活動を実施した。その後、5月26日から復興支援活動として様々な活動を実施、その中でAMDAは7月より障がい者支援として西嶋理学療法士を派遣した。同月よりネパール政府が開始した「車いす製造技術研修」で製造された車いすを適切に使うため、西嶋理学療法士は現地の障がい者団体ILCLとともに、障がい者を訪問し身体と環境の評価によって引き渡すなどの活動を行った。その後は地方に活動範囲を拡大し、更に障がい者の自立生活に向けた支援も進めた。また、「障がい」と「病気」を混同し、どうしてもよいのかわからず寝かせてしまい、

結果として寝たきりが進んでしまうネパールの人たちに  
対し、「障がい」について理解していただくための活動も  
実施。障がい者本人や家族だけでなく近隣住民にも自立  
に向け理解し協力していただけるよう、「IDOBATA GAFU  
Program」という家の外で近隣住民と井戸端会議のよう  
に障がいについて気楽に語り合える場を意識的に作り出  
し、専門家がその場で話をすることで正しい理解と協力の  
促進に努めた。

4年目となる第四期は、「おかやま発国際貢献推進事業」  
の協力で訪問活動や IDOBATA GAFU Program などに加え、  
ILCLの事務所内で障がい者が1週間ほど介助スタッフと自立した生活が送れるようにトレーニングをしていくプログラム「自立生活プログラム」を新たに開始、7人が受講した。そのほか、介助者トレーニングやピアカウンセリング・ワークショップも実施、受講者はその後「自立生活プログラム」で介助者、ピアカウンセラーとして参加した。

また2019年2月には「自立生活カンファレンス」が  
開催され、本プロジェクトで実施した介助者トレーニング  
とピアカウンセリングの受講者のほか、AMDAでこれまで  
訪問活動を行った対象者と家族、女性子供高齢者省大臣、  
同省障がい者担当官、ラリトプール市長、同市女性子供  
課主任、そして外部の障がい者関連団体や重度障害者ら  
75名が参加した。女性子供高齢者省やラリトプール市役  
所からの障がい者施策の報告や重度障害者による発表、  
自立生活コンセプトの講義のほか西嶋理学療法士も講義。  
AMDAの震災後から続いてきた活動の紹介とともに、「イン  
クルーシブ社会」というテーマで「障がいがあっても住み  
よい街づくり」についてプレゼンテーションを行った。

## ■熊本地震復興支援 「益城町役場職員への鍼灸治療」

- ◇実施場所 熊本県益城町
- ◇実施期間 2017年7月20日～2018年7月19日
- ◇派遣者 AMDA 災害鍼灸熊本チーム5人
- ◇受益者（2018年度）延べ89人、全期間：延べ402人

### ◇受益者の声

「鍼で身体が軽くなった。痛みが取れた。」

### ◇事業内容

2016年4月14日、16日に震度7の地震を2度も襲  
われた熊本県益城町。AMDAは、2017年7月より「支  
える人を支える」ことを目的に、益城町の復興に携わる  
益城町役場職員に対しての鍼治療を実施。益城町役場の  
会議室で月2回、1日あたり約15人をAMDA災害鍼灸  
熊本チームがマッサージや鍼治療を提供。また、この活

動は産業医、保健師、医療関係者による益城町安全衛生委員会とも協力し実施してきた。

事業開始当初は、疲労度が高い人が多かったものの、少しずつ緩和される様子が見受けられた。治療を受けた人の中には、他県から単身赴任で支援に入られている方も含め、肩こりや腰痛はもちろん、ご自身の身体の疲れに自覚がない方や睡眠障害のある方など多かったが、治療を受けられた後、「施術を受けた日はよく眠れた。」等の声が聞かれた。

この事業を開始から1年経った2018年7月、益城町担当者  
と協議、合意の上、同月医療支援を終了した。



## ■フィリピン・ミンダナオ島復興支援活動

- ◇実施場所 フィリピン・ミンダナオ島マラウィ市
- ◇実施日 2018年4月3日
- ◇派遣者 菅波茂／医師／AMDA国際代表、岩尾智子／看護師（米国資格）・調整員／AMDA本部職員
- ◇現地での参加者を含めた事業チーム構成  
AMDA本部、フィリピン大統領府官房長官室



### ◇事業内容

2017年5月23日にミンダナオ島マラウィ市で起きた  
フィリピン政府とIS（自称イスラム国）系マウテグループ  
による武力衝突は10月16日、ドゥテルテ大統領による  
マラウィ開放宣言で終局を迎えたが、2018年4月時点で  
7万世帯35万人以上が避難生活を余儀なくされていた。

AMDAと2017年に協力協定を締結した大統領府官房  
長官室のメルカド筆頭秘書官（当時）からマラウィ市訪

問の提案があり、AMDA から 2 人が 4 月 6 日に現地入りした。

政府現地オペレーションセンター、アマイパクパク医療センター、ミンダナオ州立大学、マラウィ市の仮設住宅などを訪問し、避難生活を垣間見た。町の中心部には爆弾が今も多数埋まっており、国内避難民は仮設住宅で暮らしている。今後マラウィ復興支援としてどのようにしていくかメルカド氏と協議を行った。

## ■ AMDA ハイチ地震復興支援 「無料歯科検診プロジェクト」

### ◇実施場所

ハイチ・フォン＝デ＝ネグル (Fonds-des-Nègres)

### ◇実施日 2019 年 3 月 23 日

### ◇現地での参加者を含めた事業チーム構成

AMDA ハイチ支部

### ◇受益者 53 人

### ◇受益者の声

「非常にありがたい。今回地方からやってきたが、今後自分が住んでいる場所でも無料歯科検診を行ってほしい。」

### ◇事業内容

現地時間 2010 年 1 月 12 日にハイチで発生したマグニチュード (M)7.0 の地震直後より、AMDA は 14 日に医師 1 人を含む緊急医療支援チームを現地に派遣、その後もカナダ、コロンビア、ペルー、ネパール、ボリビア、

インドの各 AMDA 支部からも医師を含む医療者たちが現地の病院にて診療活動に携わった。緊急医療支援後も、義足支援やスポーツ交流等の復興支援に加え、2010 年 12 月より 2011 年 2 月までフォン＝デ＝ネグル市の救世軍病院にて AMDA 本部と AMDA カナダ支部合同でコレラの流行に対する医療支援を実施した。



その後、同病院には歯科がないため、病院からの要請で 2012 年 2 月に AMDA ハイチ支部による無料歯科診療を行った。そして毎年恒例の事業として 2019 年 3 月に同病院にて第 9 回無料歯科プロジェクトを実施。当日午前 7 時から午後 5 時まで、歯科医であるケビン・マック・フレドリック AMDA ハイチ支部長他 5 名から成るプロジェクトチームは、地方から来られた 53 人の方に対し口腔チェック、洗浄、歯の修復、抜歯などの処置と、歯の健康についての指導を行った。加えて、2010 年以降のハイチでの AMDA の活動について説明を行った。

今回健診を受けた人達は今回のプロジェクトに満足されており、中には 46 年の人生で今回の歯科検診が初めてだったが、これからは半年に 1 回通院するとお話されている人もいた。

## 災害対応プラットフォーム

### AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォーム

#### ■ AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォーム概要

### ◇実施場所 岡山県、香川県、徳島県、高知県

### ◇実施期間 通年実施

### ◇事業内容

AMDA では、発生すれば死者 30 万人、300 万人が被災するとも言われる南海トラフ巨大地震への取り組みとして、「AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォーム」を設立。巨大地震が発生した場合に、孤立しやすい四国の徳島県・高知県 10 か所の避難所にて迅速に支援活動を行えるよう、自治体、医療機関、企業などが一体となり準備を進めている。連携協定を結ぶ自治体や医療機関、経済団体と緊密に連携し、

#### ①食糧等の事前備蓄

#### ②支援に駆けつける医療機関と支援に入る徳島県・高知



県の自治体との事前マッチング、事前交流などを実施。

2018 年度は、四国での備蓄準備や他団体主催の訓練参加に加え、新たに医療機関との協力協定を締結。

また、7 月より実施した西日本豪雨災害被害者緊急支援活動には、本プラットフォームに参加している多くの自治体、医療機関等が協力、参加した。



【訪問先】

日程	訪問先 (敬称略)	日程	訪問先 (敬称略)
4/22	自衛隊記念行事 (第 14 旅団普通寺駐屯地)	12/19	さくら診療所 (備蓄水 40 箱の移送)、美馬市・阿波市へ挨拶、ホウエツ病院で訓練の打合せ
5/1	十字屋グループと岡山県吉備中央町への訪問	12/25	さめじま病院、佐賀医大 (佐賀県) へ訪問
6/7	高知市内の備蓄物資在庫確認・追加物資の検討	1/25	岡山県トラック協会へ訪問
6/17	岡山県 EMIS 訓練の見学	1/26	岡山市東区パネル展示
6/28	徳島県美波町へ備蓄用の水を搬送	2/14	諏訪中央病院 (長野県) との協定式
7/2	高知県黒潮町へ備蓄用の食糧ユニットと水の搬送	3/13	高知医療センターと AMDA 高知クラブへ訪問
8/7	モンゴルのアルタンザガス先生との徳島訪問	3/25	徳島県庁訪問 (会計確認)
8/28	徳島県訪問 (美波町、海陽町、阿南市、美馬市)	3/28	高知県協議会
11/7	株式会社永燃 (岡山市) に訪問		
11/28	高野山 蓮華院 (御住職にガソリンの相談)		

【訓練】

日程	訓練名	活動内容
6/1	AMDA 南海トラフ災害対応シミュレーション	合同対策本部設営訓練。 岡山県総社市の中央公民館で本部設営とレイアウト確認を行う。
9/1	徳島県防災訓練	1 チームがホウエツ病院に到着後 (10 時到着予定)、阿南市へ向かう。 この間の状況について、徳島県が県民に対して提供している安否確認サービスを使って本部リエゾンと情報共有 (本部との情報共有訓練)。 AMDA 到着についてホウエツ病院が AMDA に代わり EMIS に代行入力した。
10/13	南海レスキュー	陸上自衛隊第 14 旅団のヘリで、普通寺駐屯地からホウエツ病院までチームの輸送。 その後、さくら診療所で倉庫に移動し物資の確認を行う。
11/25	岡山県赤磐市防災訓練	赤磐市の防災訓練でパネル展示 & 赤磐市よりデモンストレーターとして参加。
12/16	徳島県阿南市防災訓練	阿南市民による防災訓練への見学としての参加。
1/19	徳島県 AMAT 訓練	徳島県 AMAT 訓練の中で、特養老人ホームが福祉避難所となり、AMDA チームが入る。

【事前交流】

日程	訪問者	活動内容
4/6	徳島県美波町	美波町より副町長交代の挨拶と合わせて、マッチング医療機関への訪問。 (福山医療センター、倉敷中央病院)

■第 5 回 AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォーム調整会議

- ◇開催場所 岡山国際交流センター (岡山市北区)
- ◇開催日 2018 年 11 月 24 日
- ◇主な参加者・団体 友實武則・赤磐市長、田原隆雄・備前市長、中四国の自治体職員、陸上自衛隊、海上保安部、医療機関関係者、企業関係者など
- ◇参加者 258 人
- ◇事業内容

11 月に「AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォーム」の第 5 回調整会議を岡山市内で開催、連携する自治体や医療関係、企業からの関係者並びに陸上自衛隊、海上保安部の方も含め合計 258 人が出席した。



議長団である総社市、丸亀市、赤磐市と岡山経済同友会の各代表並びに菅波 AMDA 理事長より挨拶の後、7月に発生した西日本豪雨災害に関し、毛利好孝・岡山県備中保健所長兼岡山県備中県民局次長、河田秀則・総社市危機管理室長、村松友義・まび記念病院院長、吉備医師会より浅野直・あさのクリニック院長らが活動内容を報告した。また、西日本豪雨災害被災者緊急支援活動でも活動していただいた AMDA 災害鍼灸ネットワーク代表世話人の今井賢治・帝京平成大学教授より「被災者には一時的な医療では補えない。心のケアを含め総合的な対応が必要。」と、災害鍼灸の重要性を訴えた。

続いて南海トラフ災害について AMDA の取り組みについて状況報告を行った後、徳島県、高知県や支援に回る各自治体より、津波タワーの設置や学校、病院の高台移転、自主防災組織の設置など取り組みの状況を説明。更に訓練内容について南海トラフ災害対応プラットフォーム運営委員長である林秀樹・ホウエツ病院院長や自衛隊第13旅団、水島海上保安部の方より報告があった。

菅波代表より今後の災害時の支援活動として、診療や調剤といった機能を持つ車両10台程度が医療チームに同行する「AMDA 災害医療機動チーム構想」を発表した。

最後に、友實武則・赤磐市長が調整会議を総括、田原隆雄・備前市長によるあいさつで閉会した。

## ■第5回 AMDA 被災地間交流フォーラム

◇開催場所 丸亀市 北消防署 (香川県丸亀市大手町)

◇開催日 2019年2月17日

◇主な参加者・団体 梶正治・丸亀市長、麻田ヒデミ・瀬戸健康管理研究所 SHL 丸亀健診クリニック院長、東北からの参加者10人、岡山・高知・徳島県の行政関係者15人

◇参加者数 46人

◇事業内容

東北各地から東日本大震災復興商店街やNPO法人が参加し、被災商店街と地域の復興の現状について報告さ



れ、その経験を「南海トラフ巨大地震」への対応に活かす目的で始まった本フォーラムだが、今回は初めて四国で開催、香川県丸亀市で行われた。

梶正治・丸亀市長より「南海トラフに有意義なアドバイスをいただければ。」とのご挨拶で開会。その後、丸亀市内で活動をされている瀬戸健康管理研究所 SHL 丸亀健診クリニック 麻田ヒデミ院長より、ご自身の阪神大震災、東日本大震災、そして西日本豪雨災害での支援活動を振り返ったうえで、「AMDA と南海トラフに対して予防的な活動を行っている。起こってからではなかなか難しいので、事前に何かやっていくというのは、予防という意味で大変大事。」と話された。

その後、東北からの参加者が現在の復興状況などを報告、続いて岡山・四国の自治体、医療機関、一般住民も参加し、各自治体から南海トラフ災害への取組を報告した。更に、2018年7月に発生した西日本豪雨災害の状況や復興計画について、この災害で被災した総社市の方がお話しされた。

フォーラム後、東北からの参加者は徳島県阿南市に移動し地元住民の方々と交流した。

東北からの参加者からは「今回初めて四国に来た。地元の方と密に話ができ、有意義だった。」「徳島の住民の災害に対する高い意識を感じた。来年も地元住民の方々と接する機会を取って欲しい。」「東北の経験から、命だけ残せば何とかなる。」との感想があった。

## ■第5回 AMDA 災害鍼灸チーム育成プログラム

◇開催場所 朝日医療大学校、岡山県立大学

◇開催期間 2018年11月23日～24日

◇主な参加者

鍼灸師、教育関係者、鍼灸専門学校生など

◇参加者数 55人

◇事業内容

南海トラフ巨大地震含む今後来ると予測される災害に向けて、被災地でより円滑で効果的な鍼灸活動ができるよう、11月23、24日に「第5回 AMDA 災害鍼灸チーム育成プログラム」を開催した。全国から災害鍼灸の経験者、災害支援に興味のある鍼灸師、学生ら、合計55名が参加した。

初日は、過去に AMDA 災害鍼灸活動に従事した鍼灸師の方々、そして AMDA 菅波理事長を講師として、過去の災害支援での経験を共有した。菅波理事長は、鍼灸師は被災地で医薬品がない状況でも鍼等で治療が可能となること、更に実際に肌に触れて被災者に問いかけることのできる鍼灸・マッサージの重要性を語った。AMDA 災害鍼灸ネットワーク代表世話人で帝京平成大学の今井賢治教授は、「通常時とは環境が違う被災地では、普

# GPSP 魂と医療のプログラム

## ■モンゴル・平和への誓い

◇実施場所 モンゴル・ウランバートル

◇実施日 2018年9月2日

◇派遣者 菅波茂 / AMDA インターナショナル代表、難波妙 / AMDA GPSP 支援局長、高崎裕子 / 川崎医療福祉大学医療技術学部感覚矯正学科 視能矯正専攻教授、守田好江 / 視能訓練士、池本奈津希、佐々木静香、蜂谷雪乃、永井優美 / 川崎医療福祉大学医療技術学部感覚矯正学科視能矯正専攻

◇現地での参加者を含めた事業チーム構成

AMDA 本部、AMDA モンゴル支部、宗教法人大本、ガンダン寺院、人類愛善会モンゴル支部

◇受益者数 30人



## ◇事業内容

AMDA は平和の定義を「今日の家族の生活と明日の家族の希望が実現できる状況」としている。今日の家族の生活とは健康で食事ができること、明日の家族の希望とは子どもたちが教育を受けられることである。AMDA は医療と魂のプログラムとして、2000年より平和への希求を続ける事業を行っており、医療分野として、モンゴルにおいては2010年から子どもの健康と教育に焦点をあて、就学前の眼科健診の必要性をモンゴル厚生省、モンゴル眼科協会などとともに広く社会に訴えてきた。また、ウブスハンガイ県グチンウス村では人類愛善会モンゴル支部とともにビタミンを多く含んだ果実の栽培などの村おこしを応援している。9月2日、医療と魂のプログラムの一環として、眼科健診事業に参加したメンバーやモンゴル事業関係者が一堂に集い、次世代とともに平和を希求し続けることを誓った。



段の鍼灸治療とは違った配慮や活動が必要になる。」と、過去の経験から災害鍼灸の特異性について語り、南海トラフ災害支援に向けてより多くの鍼灸師の確保が必要だと、参加者に災害支援への参加を呼び掛けた。AMDA 熊本鍼灸チームの吉井鍼灸師及び松浦鍼灸師は、熊本地震での緊急支援活動について時系列で活動を紹介、活動中に生まれた課題を共有し、場所が確保できなくても治療できるように「災害鍼灸カー」を準備していると話した。朝日医療大学校の副学校長の山口大輔鍼灸師は、西日本豪雨災害支援活動について振り返りながら、鍼灸師の確保、活動場所の確保、そして鍼などの備品の確保など、活動中に苦労した点について述べ、「職員の調整が比較的しやすい、朝日医療大学校のような学校関係と協力協定を結んでいくことで、人員不足は解消されるのではないかと今後のAMDA 災害鍼灸の取り組みに対しても提案した。参加者からの質疑応答の時間では、「鍼灸師だけの活動では受入側との調整がかなり大変だった。AMDA の強みは避難所の保健師など、他業種との連携が強いことだと、他の団体の災害鍼灸に参加した時に感じた。」などの意見が出た。

2日目は、初日の内容を受け今後の南海トラフなどの災害に向けて、今後どう取り組んでいけば良いのかなど、参加者から質問や意見を積極的に話す総合討論の時間を設けた。鍼などの資機材の管理、患者の情報引継ぎ、調整業務の話や、他の医療チームとの連携など、災害鍼灸活動中に生じる様々な課題の解決方法について話し合った。「災害鍼灸活動はあくまで緊急支援活動であり、地元の鍼灸師が立ち上がった時点で引き揚げるべき。」「地元の鍼灸院を圧迫するべきでない。むしろ地元の鍼灸師に繋いでいくことで、長期的な避難者の方々のケアが可能になる。」と今井教授が災害鍼灸支援活動に関する考えも共有した。地元鍼灸師や他業種との連携をしてきたAMDA 災害鍼灸に関して、「災害支援の経験が豊富なAMDA が災害鍼灸に力を入れてくれているのは心強い。」という声もあった。

## ■第2回 AMDA・赤磐市防災国際フォーラム

### ◇開催場所

桜が丘いきいき交流センター（岡山県赤磐市）

### ◇開催日

2018年5月12日

◇参加者・団体 友實武則・岡山県赤磐市長、田中元（はじめ）・熊本県益城町立広安小学校元校長、赤磐市職員、一般市民

◇参加者数 約100人

### ◇事業内容

「第2回防災国際フォーラム」を赤磐市とAMDA主催で開催した。「私たちは熊本地震を忘れない。熊本地震から赤磐市の防災を考える。」をテーマに、講演や対談、寸劇を通し、防災の心構え、事前準備の必要性などを参加者に伝えた。



当日、2016年4月の熊本地震でAMDAが活動を通じてお世話になった避難所の熊本県益城町立広安小学校の当時の校長、田中元先生が「地震後の様子と避難所運営」をテーマに講演。余震が続く中、恐怖とストレスで限界状態に追い込まれた避難民の表情、学校再開に向けた課題や対策、児童と避難民との交流など体験に基づいて話し「備えが不十分だった。油断があった。」と地震への備えの大切さを強調された。

講演に続き、田中先生と、益城町出身で実家が全壊する被害に見舞われた中で、広安小学校で長期にわたり避難民の支援などに取り組んだ難波妙・AMDA理事が登壇し、熊本地震発生から広安小学校での活動などを振り返り対談した。「命の大切さ、人の温かさを感じた。」「献身的なボランティアの活動に感動した。」「災害は忘れた頃ではなく、忘れる前にやってくることを肝に銘じたい。」と語った。

フォーラムの締めくくりとして、赤磐市職員による寸劇で、持ち出し袋の事前準備の大切さを伝え、参加した市民からも「楽しく防災が学べた。」「熱演ぶりに市職員の意欲が伝わってきた。」という声が聞かれた。

参加者は「講演内容は新聞やテレビで知る情報よりも詳しく現場の様子が目に浮かぶようだった。」「対談は有益な指摘が多かった。忘れないよう心に留め、事前準備に取り掛かりたい。」と、このフォーラムの感想について述べた。

## ■第3回 AMDA・赤磐市防災国際フォーラム

### ◇開催場所

桜が丘いきいき交流センター（岡山県赤磐市）

### ◇開催日

2018年11月11日

◇参加者・団体 友實武則・岡山県赤磐市長、太田裕之・倉敷市真備町防災士、AMDA 中学高校生会・岡山県赤磐市中学生・広島県立福山誠之館高校生計11人、赤磐市職員、一般市民

◇参加者数 約100人

### ◇事業内容

赤磐市とAMDAが2018年5月に引き続き、「第3回AMDA・赤磐市防災国際フォーラム」を主催。「自然災害への備え」「生徒が行った国際貢献活動」の2つをテーマに開催した。

2017年より赤磐市からAMDAへ出向した三宅孝士氏が、西日本豪雨災害被災者支援や北海道胆振東部地震被災者支援、そして2年続けて現地で参加したスリランカ平和構築プログラムについて報告を行った。

その後、赤磐市出身で真備町在住の防災士である太田裕之氏より、西日本豪雨災害にて自ら被災しながらも発災翌日から避難所の運営に携わるなどご自身の体験を含めて講演。避難所開設後に名簿整備を行う必要性、避難者の中で自治組織を作って運営に参画してもらうことや衛生管理の重要性など、活動中の苦労話も含めて話をされた。

最後に、2018年8月に「AMDAスリランカ平和構築プログラム」に参加したAMDA中学高校生会・岡山県赤磐市中学生・広島県立福山誠之館高校生計11人がこのフォーラムにて活動を報告。異文化体験の中で学んだ事や日常の当たり前のありがたさ、平和についての自分達の役割などを発表した。

参加者から講演について「避難所の運営について具体的によくわかった。」「自宅が被災されたのに防災士として活動されたことに頭が下がる。」などの感想が寄せられた。



## ■ジャパン - テキサスリーダーシップ シンポジウム出席

- ◇実施場所 アメリカ・テキサス州サンアントニオ
- ◇参加日 2019年3月27日
- ◇派遣参加者 難波妙 / AMDA 理事



### ◇事業内容

アメリカ、テキサス州で「ジャパン - テキサスリーダーシップシンポジウム」が開催された。このシンポジウムは、日米間において過去60年に渡り育まれた441組の姉妹都市による市民外交ネットワークの持続的連携と活性化を目指し、SCI（全米国際姉妹都市協会）が主催。当日は総勢250人が参加し、文化、教育、経済、投資など、様々な内容の議論が展開された。

このシンポジウムに、2018年12月に協力協定を締結した国際キフからの招待を受け、AMDAとして難波妙理事が参加。アメリカ合衆国副大統領夫人による基調講演の後に行われたパネルディスカッションのパネリストとして、災害時に実現した相互扶助について発言を求められた難波理事は、1995年のサハリン地震被災者支援活動での話を例に出し、ロシア政府から一旦受け入れを拒否されたものの、AMDAの活動は4か月前に発災した阪神淡路大震災にサハリンから支援を受けたお礼が目的であると力説すると、ロシア政府が快諾したことを語った。更に、2018年夏の西日本豪雨災害の際の岡山県総社市と他の自治体の対口支援の例を紹介。災害支援活動を支えた相互扶助の理念に、会場からは「災害時に実現する相互扶助が、迅速な対応につながる事に感心した。」「AMDAと一緒に今後何か活動が出来る事があれば。」など多くの賛同をいただいた。

また、今回のシンポジウムの開催地であるサンアントニオ市と熊本市が姉妹都市縁組を結ばれていることから、AMDAが2016年の熊本地震発生直後から緊急支援活動並びに復興支援活動を行っていたことについても感動された、と参加者の方よりお声掛けいただいた。

## 健康増進

## プライマリーヘルスケア

### ■インド・ブッダガヤ AMDA ピースクリニック 母子保健事業

- ◇実施場所 インド・ビハール州ブッダガヤ地区
- ◇実施期間 2009年11月～現在
- ◇派遣者(2018年度) 菅波茂 / 医師 / AMDA インターナショナル代表、難波妙 / 調整員 / AMDA GPSP 支援局長、岩尾智子 / 看護師 (米国資格)・調整員 / AMDA 本部職員
- ◇現地での参加者を含めた事業チーム構成  
AMDA 本部、AMDA ピースクリニック
- ◇受益者数 (2018年度) 延べ343人
- ◇受益者の声

「義理の姉が妊娠した際、AMDA ピースクリニックにお世話になっていた。その義理の姉に紹介してもらい私もお世話になっている。妊産婦健診を受けられ、薬もいただける AMDA ピースクリニックはありがたい。」



### ◇事業内容

AMDA ピースクリニック (以下 APC) は2009年にインド伝統医療であるアユルベーダクリニックとして、ビハール州ブッダガヤに開院。2014年からは、地域のニーズに対応し、母子保健サービスを提供している。

活動を行っているビハール州の農村部の人々は、1か月778ルピー (約470円) で暮らしている。主な産業は農業・酪農。ホテルが立ち並ぶブッダガヤの中心部ではホテルに勤める人たちもいる。字が読める人の割合(識

字率)は全体で60%。女性の約半数は字が読めない。そのため、活動の中で妊産婦に情報を伝達する際には工夫が必要とされる。ビハール州では、10万人の出生あたり妊産婦208人(日本では34人)が死亡している状況がある。

このような状況に対応すべく、現在妊産婦を対象に提供している母子保健サービスは、主に3つの活動を指す。1つ目は医師が月2回行う「妊産婦健診」で、必要に応じて血液検査もしている。受診料は栄養サプリメント・医薬品を含め1回20ルピー(約30円)と、受診しやすい価格設定にしている。2つ目は「APCスタッフによる妊産婦宅訪問」。1軒1軒回り、妊産婦の相談にのることで、健康状態の確認と信頼関係を構築している。3つ目は「健康教育・栄養プログラム」、週1回APCスタッフが妊産婦参加者に健康に関する知識を口頭で伝える30分程度のクラスを開講している。トピックは、妊産婦からの要望に応えたり、シーズンによって流行しやすい病気などから主に選んでいる。クラスの後には、地元で安価に手に入る材料を使用した栄養満点の料理を参加者に提供している。

## ■カンボジア健康啓発事業

### 概要

◇実施場所 カンボジア・トボンクムン州、プノンペン

◇実施期間 通年実施

◇事業内容

AMDAカンボジア支部は、株式会社山一観光様のご支援を受け、2018年度は主に下記3つのプロジェクトを実施した。

- ① HIV/エイズ、性感染症関連プロジェクト
- ② サッカークラブ活動
- ③ 青少年フォーラム

### ① HIV/エイズ、性感染症関連プロジェクト

◇実施場所 カンボジア・トボンクムン州

◇実施期間 2005年8月～継続中

◇受益者数(2018年度) 延べ約700人

◇事業内容

AMDAカンボジア支部は2018年度も引き続き、HIV/エイズに関する情報を様々な形で啓蒙活動を実施。HIV/エイズに関する情報の流布、教育やコミュニケーション用ツールの開発やHIV/エイズ予防キャンペーン用のTシャツ製作などを行った。

また、例年通りトボンクムン州保健局を支援する形で世界エイズデーを開催。「2025年までにカンボジアのエイズ問題を解決する」をテーマに、保健局関係者や自治体関係者、ボランティア、学校の教師や生徒達、HIV/



エイズとともに生きる人々など、300人を超える人々が集まった。行進の後、保健局に場所を移し、音楽の演奏や寸劇の実演とともに、今年度の目標達成について発表が行われた。

### ② サッカークラブ活動

◇実施場所 カンボジア・プノンペンなど

◇実施期間 2015年7月～継続中

◇受益者(2018年度) 約20人

◇事業内容

AMDAカンボジア支部が主催するサッカークラブは、定期的に活動を行っている。2018年度はチェンラ大学と協力して新たなチームを結成し、学生の中から若手の選手を育成、大学の公式チームへと昇格させた。この後20名の選手を選出し、他大学との公式試合を行っていく予定。

### ③ 青少年フォーラム

◇開催場所 カンボジア・チェンラ大学

◇開催日 2019年3月9日

◇参加者数 100人

◇事業内容

チェンラ大学およびNGO団体Action for Healthと共催で、リプロダクティブヘルスや性教育をテーマとした青少年フォーラムを開催。会場となったチェンラ大学には、100人の学生やボランティアが集い、性感染症、将来を見据えた家族計画、若者の皮膚疾患、骨粗鬆症等に関する基礎講義や質疑応答が行われた。参加者による周囲(家族や友人)への知識の拡散が期待される。

## 医療技術移転事業

### ■インド・AMDA ピースクリニック看護師 ネパールにて研修

- ◇実施場所 ネパール・AMDA ダマック病院
- ◇実施期間 2018年4月15日～29日
- ◇研修参加者 バビータ・クマリ／看護師／インド・AMDA ピースクリニック
- ◇現地での参加者を含めた事業チーム構成  
AMDA ダマック病院
- ◇参加者の声

「研修中に学んだ患者ケアの重要性および知識を今後の活動に生かしたい。」

#### ◇事業内容

インド・AMDA  
ピースクリニック  
(以下APC)で働き  
始めて4年目になる  
バビータ看護師が  
隣国ネパールに  
あるAMDAダマック  
病院で母子保健  
サービスを中心に  
研修を受けた。最  
初は言葉や環境に  
対する不安が大き  
かったが、ナビ



同病院院長先生をはじめスタッフの方々の温かい対応により、学びの多い充実した研修となった。研修を受けた看護師は「AMDAダマック病院はAPCに比べてかなり規模の大きい病院で外来、手術室、救急外来など24時間体制で動いている。スタッフも責任をもって患者さんに対応している様子に感動した。研修中に学んだ患者ケアの重要性および知識を今後の活動に生かしたい。」と語った。

看護師は帰国後、研修で得た知識を積極的にAPCで共有している。6月にAPCで開催した健康教室でも、早速ネパールで学んだ離乳食を参加した妊婦・褥婦に紹介。「高い市販の離乳食を購入しなくても、栄養価の高い離乳食を安価な材料で作ることができる。」と話し、続く栄養プログラムでは6カ月以上の乳児にトウモロコシ、豆、ナッツ、麦、大豆の種を粉状にしたものを牛乳に混ぜた離乳食を提供した。教室参加者からは「予算内で手に入る材料を使った離乳食で、赤ちゃんの健康にも良い。早速、自分でも作りたい。」という声も聞かれた。

### ■モンゴル医師研修受入

(2018年度岡山県国際貢献ローカル・トゥ・ローカル技術移転事業)

- ◇実施場所 岡山済生会総合病院(岡山市北区)
- ◇実施期間 2018年8月9日～9月26日
- ◇招聘者 バトラフ・ムンフバヤル／医師／モンゴル国立医科大学講師
- ◇受益者の声

「日本人はお互いが助け合うという相互扶助の気持ちがあり感動した。私も今後はAMDAのメンバーとして役立ちたい。」



#### ◇事業内容

2018年7月末、モンゴル国立医科大学よりバトラフ医師が岡山県の国際貢献ローカル・トゥ・ローカル技術移転事業の助成を受け7月末に来岡、翌月より岡山済生会総合病院にて内視鏡の技術や環境衛生など包括的な医療を学んだ。

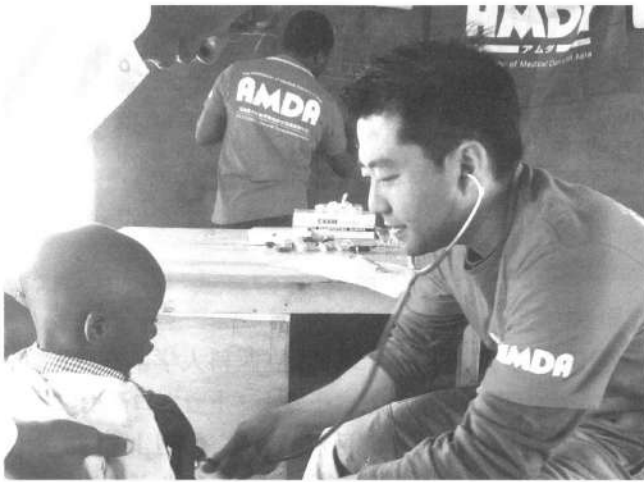
消化器内視鏡について、モンゴルで最も求められている胃がんの早期発見のための画像診断技術向上を第一目的とし、診断内視鏡から治療内視鏡まですべての手技について研修を受けた。岡山済生会総合病院は外国人医師が短期的に医療行為を行うための実習病院として国から認可されているため、バトラフ医師は午前中は消化器内視鏡の実習、午後からは肝疾患の研修に励むことができた。加えて内視鏡カンファレンスへの出席の機会も得た。また同院附属看護専門学校でのモンゴル紹介の際には学生からの要望に応じてモンゴル国家を堂々と歌った。

医師は研修期間中に、当時AMDAが活動していた西日本豪雨災害被災者緊急支援活動の活動場所も訪れ、避難者たちに「頑張って!」と日本語で激励の言葉をかけたり、炎天下で作業活動を行う方たちに冷たいおしぼりを配るなど行った。遠いモンゴルからの来訪者に、驚いた様子とともに、喜びの声をあげてくださる方も多かった。バトラフ医師は、今回の訪問を通じて、被災地の惨状に心を痛め、これほどの困難にみまわれた子どもと高齢者に対する心のケアの必要性を出席した総社市災害対策本部会議で強調した。

研修後、「学んだ技術を祖国で普及させ、患者サービスの向上に努めたい。」と意欲を示した。

## ■ルワンダ小児医療・学校保健

- ◇実施場所 ルワンダ・キガリ市内及びギクンビ地区
- ◇実施期間 2018年9月14日～24日
- ◇派遣者 頼藤貴志／医師／岡山大学大学院環境生命科学研究科准教授、浦山健治／医師／国立病院機構岡山医療センター小児科、古賀翔馬／医師／名瀬徳洲会病院
- ◇現地での参加者を含めた事業チーム構成  
NPO法人ルワンダの教育を考える会、長崎大学熱帯医学研究所
- ◇受益者 950人



### ◇事業内容

2015年以降学校健診の普及を目指し、毎年日本より医師を派遣しルワンダで健診を実施している。2018年は前年同様ルワンダ行政の依頼を受け、首都キガリのウムチョムイーザ学園とキバガバガ小学校、そしてミヨベ幼児児童発達センターの合計3カ所で学校健診を行った。今年度は本部からの派遣者や地元協力者に加え、長崎大学熱帯医学研究所の山本太郎医師を含む研究チームも一緒に活動した。

また、今回通訳兼アシスタントして現地の医学生5人がボランティアとしてこの活動に参加。様々な病気を発見し早期治療するのに大変有効である健診の重要性などを学ぶことができた、と語った。

さらに、この学校健診の活動に当初から関わり、今回も参加したルワンダ医師、カリオペ・シンバ・アキンティジェ氏（長崎大学熱帯医学研究所留学中）は「子どもたちのために新しい事業に参画することに大いなる感動を覚え、またチャレンジしていくことに誇りに感じた。」と語った。

## ■モンゴル医療セミナー



- ◇実施場所 モンゴル・ウランバートル
- ◇実施期間 2018年9月17日～19日
- ◇派遣者 佐藤拓史／医師／東亜大学医療学部教授・AMDA理事、難波妙／調整員／AMDA GPSP支援局長
- ◇受益者数 延べ210人
- ◇受益者の声

「モンゴルの救急医療の為に、このような貴重なセミナーを我々だけが独占してはならないと思う。翌年は是非ウランバートルだけでなく郊外の救命救急医にもセミナーを行いたい。」

### ◇事業内容

2017年に引き続き、2018年も9月17日から2日間、モンゴルの救急医療サービスセンターにて佐藤医師による救命救急についてのセミナーが行われた。

モンゴルでは、医師が救急車に同乗するため、医師の治療の知識と技術が向上すれば救命率は確実に上がることから、今回同センターの主力10名の医師を対象に、モンゴルの救急の現場ではまだ実施されていない骨髄輸液、輪状甲状靭帯切開術、心タンポナーデの治療などを、個別の技術指導を中心として実施した。セミナーを終えたトレーニング担当課長は、翌年は是非ウランバートルだけでなく郊外の救命救急医にもセミナーを行いたい、と、更なる意欲を語った。

同月19日には、ウランバートル保健局80周年記念シンポジウムに佐藤医師が演者として招待を受け、当日200人以上の前で災害時の感染症対策について講演。シンポジウム終了後、佐藤医師は「モンゴルの災害医療危機管理に携わる様々な関係者との意見交換もでき、将来に繋がる協力関係を築いていくことの重要性を改めて実感した。」と語った。

## ■ネパール・AMDA ダマック病院事務局長研修受入

- ◇実施場所 岡山市、岡山県倉敷市、岡山県総社市、徳島県吉野川市、徳島県美馬市





◇実施期間 2018年9月30日～10月10日

◇招聘者 ビム・ダマラ／ネパール・AMDA ダマック病院事務局長

◇受益者の声

「病院内は最新の設備が整備され、清潔ですばらしい。医師も薬を出すだけでなく、患者が安心するようカウンセリングをしている姿に感動した。」

◇事業内容

AMDA ネパール支部が運営するネパールのAMDA ダマック病院のビム事務局長が来日、国内の医療機関を見学し、病院運営などを学んだ。

今回の研修は、AMDA インターナショナル菅波代表が2年前にダマック病院長より研修の要請を受け、AMDA 本部と同病院の合同事業として実施。岡山市の岡山済生会総合病院を始め、倉敷市、総社市及び徳島県内5カ所の医療機関で、病院の運営管理や会計処理、医療廃棄物の処理方法をはじめ、病棟やナースステーションなどを見学した。

見学を終え、「日本で学んだ病院運営のノウハウを祖国で生かしたい。」と抱負を述べた。

## ■ベトナム医師研修受入

◇実施場所 岡山済生会総合病院(岡山市北区)

◇実施期間 2018年10月1日～12月27日

◇招聘者 ズオン・ホアン・ミン／医師／ベトナム国防省軍175病院、グエン・ヴァン・マイン／医師／ベトナム国防省軍175病院

◇受益者の声

・「この3か月で、本当に多くの知識と技術を得ることができた。済生会病院とAMDAに感謝している。」

・「済生会病院では分野だけでなく、仕事への情熱と献身の重要性を学ぶことができた。温かく自分を受け入れてくれた周りの皆様に感謝している。」

◇事業内容

2018年3月にベトナム国防省軍175病院の院長が来日の際に、2015年に協力協定を締結した岡山済生会総合病院並びにAMDAとの三者による会議にて2018年の医師2人の済生会総合病院での研修が決定した。

医師2人は同年10月に来岡、12月下旬まで済生会総合病院の各担当医師の指示の下、研修を受けた。ミン医師は主に日本での人工透析や腎臓移植など腎臓病にかかわる治療、対応などの研修を希望し、約3か月間、済生会病院で研修するだけでなく近隣の病院を訪問し地域医療について話を伺うことができた。マイン医師は消化器系の外科手術について知識だけでなく手術にも参加、様々な技術を習得することができた。また2人は研修期間中に開催された「第5回AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォーム調整会議」に出席、通訳を通しAMDAの南海トラフ災害に向けた取り組みについても学んだ。

AMDAはこの研修に関し、両病院間の調整を担当。これまでに175病院より医師3人、スタッフ1人を済生会病院等での研修について調整、準備等を行ってきている。

## ■モンゴル再生医療センターより見学

◇実施場所 倉敷成人病センター(岡山県倉敷市)、岡山二人クリニック(岡山市北区)

◇実施期間 2018年10月9日～11日

◇招聘者 ノムンダリ・バートル／医師／モンゴル再生医療センター院長、オドフー・エンフトゥヴァン／医師／モンゴル再生医療センター、アリウナー・ガンボルド／医師／モンゴル再生医療センター

◇受益者の声

「モンゴル再生医療センターが10年後に目指す理想の病院の姿を岡山で見学させていただいた。今後も協力関係をさらに深め、ご指導いただければありがたい。」



◇事業内容

2018年10月にモンゴルの首都ウランバートルにあ

る不妊症専門病院、モンゴル再生医療センター（以下RMC）より医師3人が来岡した。

9日にAMDA事務所にて、RMCとAMDAは、災害などの際、医療福祉面で被災者らをサポートするほか、RMCはAMDA多国籍医師団に協力する等、相互扶助を通して世界平和に貢献する内容の協力協定を締結。ノムンダリ院長は「締結ができ、本当に心強い。AMDAの理念である相互扶助の精神を生かして活動していきたい。」と語った。

その後、3人はAMDA職員と、岡山県内で不妊症の臨床技術に優れた倉敷市成人病センター及び岡山二人クリニックを見学。見学後、ノムンダリ院長は「それぞれの技術に感動した。」と述べた。また、RMCが以前医療関連機器を購入した株式会社アステックも訪問した。

RMCは2017年、モンゴルでは3番目の不妊症専門病院として設立。患者数は年間で約1000人。モンゴルでは約10%が不妊症とされている。

## ■ネパール内視鏡技術研修事業

### ◇実施場所

ネパール・AMDA  
ダマック病院

### ◇実施期間

2019年2月24日  
～3月1日

◇派遣者 佐藤拓史  
／医師／東亜大学医療学部教授・AMDA理事

◇受益者数 ディウス  
ス医師、AMDAダマック

ク病院長ナビン医師、他病院関係者3人

◇AMDAダマック病院長 ナビン医師より

「ディウス医師が佐藤医師の指導の下で内視鏡技術を学び、多くの患者の検査ができるようになったことはとても嬉しく思っている。佐藤医師は日本での忙しい日程を調整し、ネパールに来てくださり、ダマックでの内視鏡の発展に貢献していただいていることは本当に嬉しい。AMDAダマック病院の代表として深く感謝している。」

### ◇事業内容

2018年2月にネパール南東にあるインドの国境近くのジャバ郡、ダマック市のAMDAダマック病院で地元医師を対象に、佐藤医師による内視鏡技術研修を初めて実施した。この時、「ダマックには内視鏡検査と治療が十分に出来る医師は未だにおらず、（この時研修を受けた）ダマック病院のディウス医師が独り立ちできるようになることが大変重要だと痛感した。」と佐藤医師が継続的



教育の重要性を訴え、2019年2月、佐藤医師による同病院での2度目の研修の実現に至った。

今回の研修には、2016年8月より3か月間、岡山済生会総合病院で岡山県海外技術研修員として内視鏡治療に関する研修と、昨年の佐藤医師による研修を受けたディウス医師のほか、地元医師らも参加。特に昨年の研修から1年の間に600人の患者の上部内視鏡検査を行ってきたディウス医師の検査を見た佐藤医師は、同医師の技術向上に向けた真摯な姿勢と成果に深く感銘した、と語った。

5日間の研修期間中、ディウス医師が「日本から自分の恩師が来られる。」と多くの患者に知らせた結果、73人の患者が内視鏡検査を受けることとなった。受けた患者さんたちも「数年前に別の病院で内視鏡検査を受けた時に苦しい思いをしたことがあるので、今回内視鏡検査を受ける前はとても怖かった。しかし、思ったより痛くなかったので非常に楽しかった。佐藤医師とディウス医師に心より感謝している。」「口からカメラを入れて内視鏡検査を受けると聞いた時にとても怖く感じた。しかし、意外と楽に内視鏡検査を受けることができると嬉しく思った。我々のために遠い日本からここまで来ていただいたことに『ありがとう』を伝えたい。」などの声が聞かれた。

今回セミナーを終えた佐藤医師は、「技術を伝え残していくミッションは、また次の世代の医師達に広く受け継がれていくという重要な意味を持つ。未来へつながっていくミッションである。ネパールの医師達が日本の医療技術を学んで自分達で自立し、自力でより多くの治療ができるようになるようとする姿勢は、私の医師を志した原点を思い出させてくれた。また、継続していくことの重要性を強く感じている。」と語った。

## 医療支援事業

### ■モンゴル国視能訓練技術移転プラン事業

◇実施場所 モンゴル・ブルガン県ヒシグンドウル村、ウランバートル市ソングノハイルハン区

### ◇実施期間

眼科健診：2018年8月27日～9月4日

眼科治療開始90周年記念式典：2018年10月4日

◇派遣者 菅波茂／AMDA国際ナショナル代表、難波妙／AMDA GPSP支援局長、高崎裕子／川崎医療福祉大学医療技術学部感覚矯正学科 視能矯正専攻教授、守田好江／視能訓練士、池本奈津希、佐々木静香、蜂谷雪乃、永井優美／川崎医療福祉大学医療技術学部感覚矯正学科視能矯正専攻



#### ◇現地での参加者を含めた事業チーム構成

AMDA 本部、川崎医療福祉大学感覚矯正学科、人類愛善会モンゴルセンター、モンゴル眼科協会、AMDA モンゴル支部

#### ◇受益者数

眼科健診受診者 540 人

眼科治療開始 90 周年記念式典参加者 250 人

#### ◇事業内容

AMDA は、2009 年モンゴルでの眼科事業を行うことを決定。事前調査を開始、2010 年には白内障手術の無償提供。当時ウランバートル眼科協会会長のブルガン先生（現、モンゴル保健省眼科部長）の要請を受け、子どもの目を守る事業を毎年、モンゴル眼科協会等と共同で行ってきた。

今年度もウランバートル市から 400Km、車で 8 時間かかるブルガン県の 2 つの小学校とヒシグンドゥル村で 286 人、そして、ウランバートル市の隣の地区、ソングノハイルハン区で 254 人の生徒の眼科健診を実施した。

その後、小学校の 6 歳の子ども 2 割に目に何らかの問題があり、半数は眼鏡で対応できること、そして、弱視や斜視などの病気が世界的なレベルで見ても多いことなど、この健診活動での知見を、保健省ならびに日本大使館で報告。保健省副大臣より、AMDA の長年の活動への感謝が述べられ、二人の先生方と AMDA に感謝状が手渡された。

2017 年に、9 月第三日曜日を子どもの目の日として正式に制定された。これまで眼科健診を受けた子どもの数は延べ 1,563 人、眼科の専門研修を受けた地元医師は延べ 299 人となった。

#### 眼科治療開始 90 周年記念式典出席

10 月 4 日、モンゴル眼科診療 90 周年記念式典がウランバートル市内で開催され、川崎医療福祉大学感覚矯正学科学科長高崎裕子教授とともに AMDA も同式典に招待、高崎教授と難波妙 GPSP 支援局長が出席した。難波局長は開会式で、モンゴル眼科界をけん引し、AMDA の事業を常に応援して下さったモンゴル国立医科大学バ

サンフー教授、そして AMDA とともに子どもの目の健康にご尽力くださったブルガン教授その他、ご協力をいただいた多くの眼科の先生方に心からの感謝を述べた。午後のセッションでは、高崎教授が過去 3 年間に行った 6 歳児の健診データをもとに、14% に異常が見られたこと。半数は正しい眼鏡によって視力を補えるが、残り半分は、弱視か斜視であり、特に弱視は 4.7%（世界平均は 2～3%）と多かったこと。そして 3～4 歳で視力検査をし、異常を発見、適切な治療をする必要性を訴えた。地方と都市部の格差はなく、ポータブルのゲーム機の普及などで視力が悪くなる傾向があることなども発表された。

90 周年記念誌には、AMDA の活動が紹介されている。会場には、10 年間の AMDA との活動経験を思い出として、なつかしさとともに語りかけて下さった眼科医も多く、ともに再会を喜び合った。また式典に出席されたモンゴル保健省セレンゲレル大臣からは、AMDA のこれまでの貢献に対し、「AMDA をよく覚えている。活動に感謝している。」とのお言葉をいただいた。

## 友好病院事業

### ■ネパール・AMDA ダマック病院

◇実施場所 ネパール・ジャパ郡ダマック市

◇実施期間 1992 年～継続中

◇現地での参加者を含めた事業チーム構成

AMDA ネパール支部

◇診療科 麻酔科、一般科、外科、産婦人科、小児科、放射線科、整形外科医、耳鼻科、歯科、眼科

◇スタッフ数（2018 年度） 210 人（うち医師 24 人、看護師 65 人）

◇患者数（2018 年度） 延べ 4 万 5 千人以上



#### ◇事業内容

AMDA ネパール支部を実施主体として、1992 年よりメチ県ジャパ郡ダマック市で、ブータン難民と地元双方の医療支援の対象として開設。

今年度の救急外来を含む外来患者数は延べ 4 万 5 千人以上、年間分娩数は 7 千人を超える。在ネパール日本大使館の草の根・人間の安全保障無償資金協力により、

2017年10月にICUユニットの増設が完成、診療を開始。更に、2018年より内視鏡検査を開始した。これは2016年に岡山済生会総合病院にて研修を受け、その後ダマック病院にて佐藤拓史医師（東亜大学医療学部教授）による研修を受けた同病院内科医のディワス医師を中心に実施されている。

また、1996年にはAMDAダマック病院の附属施設としてAMDA健康科学学院（AMDA Institute of Health Science）が設立された。この学院では看護師コース、準助産師コース、地域医療補助師コース、臨床検査技師コースを実施しており、毎年各コースに40人の学生が入学し勉強している。

## ■ネパール・シッダールタ母と子の病院 （通称：ネパール子ども病院）

- ◇実施場所 ネパール・ルパンデ郡プトワル市
- ◇実施期間 1998年～継続中
- ◇現地での参加者を含めた事業チーム構成  
AMDAネパール支部
- ◇診療科 産婦人科、小児科、新生児科
- ◇スタッフ数（2018年度）178人（うち医師24人、看護師53人）
- ◇患者数（2018年度）延べ6万人以上



### ◇事業内容

シッダールタ母と子の病院（通称：ネパール子ども病院）は、1998年11月に阪神淡路大震災後の日本とネパールの多くの支援者の協力により設立された、首都以外では唯一の母子専門病院である。設計は安藤忠雄建築事務所がボランティアで協力してくださった。

2011年8月より新たな周産期病棟の建設を開始、翌年11月に完成した。新病棟では陣痛室、分娩室、産褥室、手術室、家族計画カウンセリング室、新生児集中治療室などを備え、妊娠・出産から新生児ケアを総合的に管理できるように配慮している。

2018年度は延べ6万以上の外来患者や救急患者が診療を受け、毎日8人以上の子どもが生まれる。

## ■ネパール・AMDAメチ病院

- ◇実施場所 ネパール・ジャパ県メチナガル市
- ◇実施期間 2008年～継続中
- ◇現地での参加者を含めた事業チーム構成  
AMDAネパール支部
- ◇診療科 一般科
- ◇スタッフ数（2018年度）23人（うち医師3人、看護師4人）
- ◇患者数（2018年度）延べ約3,000人



### ◇事業内容

ネパール東部に位置するAMDAメチ病院は、2008年に在ネパール日本大使館、メチナガル市役所、商工会議所の支援によって設立。現在はAMDAネパール支部、市役所及び商工会議所の共同プロジェクトとして運営している。

メチナガル市民だけでなく周辺の村々に住む住民が怪我や一般的な疾患のためこの病院を受診、2018年度は緊急外来、一般外来及び入院患者を含め延べ約3,000人の患者に医療サービスを提供した。

加えて、2015年より臨床検査技師のコースを開始している。

## その他

## ■インド・WHO会議に参加

- ◇実施場所 インド・デリー
- ◇参加日 2018年6月20日
- ◇出席者 菅波茂／医師／AMDAインターナショナル代表、ミナクシ・ジョシ／アユルベータ医師／AMDAインド支部事務局長、岩尾智子／看護師（米国資格）・調整員／AMDA本部職員
- ◇事業内容

2018年6月19日から21日、デリーで開催されたWHO会議に岡山県総社市の片岡聡一市長とともにAMDA菅波代表が出席した。2018年3月に開催した総社市とAMDA共催の「全国屈指福祉フォーラム」がき



かけとなり、今回、南アジアや西太平洋などのWHO関係諸国にも総社市の先駆的な福祉の取り組みを紹介することとなった。

片岡市長は、総社市の障がい者1000人雇用の取り組みや、災害時要援護者に対する政策について48の国と地域から参加したWHO担当者を前に、粘り強く進めてきた経緯と自らの福祉政策に対する信念を力強く語った。福祉面をはじめとした地方自治体の首長のリーダーシップがAMDAなどのNGOとの連携によって災害対応にも生かされていることが発信された。

## ■第1回日越国際シンポジウム（一般財団法人国際医療貢献プラットフォーム主催、総社市・AMDA共催）

### ◇開催場所

リーセントカルチャーホテル（岡山市北区）

### ◇開催日 2019年2月20日

### ◇主な参加者・団体

国・自治体：ヴー・ホン・ナム・駐日ベトナム社会主義共和国特命全権大使、チャン・コク・ヴィエト・ベトナム国防省175軍病院副院長、片岡聡一・岡山県総社市長

企業・団体（50音順）：岩本一壽・社会福祉法人恩賜財団済生会 支部岡山県済生会支部長、ゲン・ダンクォック・チャン・ダナン大学医学部学部長、ゲン・ティ・トウイ・ホア・丸天産業株式会社技能実習生代表、ゲン・ティ・ロアン・IMS 常務取締役、小林真弘・アイ・エイチ・ディ協同組合代表理事、小林米幸・AMDA 国際医療情報センター理事長、近藤実・太陽美術紙工株式会社管理部部长、佐藤紘之・丸天産業株式会社常務取締役、菅波茂・一般財団法人国際医療貢献プラットフォーム代表理事・AMDA 理事長、ダン・ティ・ミン・トゥエット・NEWTATCO（ニュータコ）ホーチミン支社長、ファン・ティ・タン・フォン・太陽美術紙工株式会社技能実習生

### ◇参加者数 213人

### ◇事業内容

逢沢一郎代議士の紹介で、2018年6月、ハノイ市

で駐ベトナム社会主義共和国日本国特命大使の梅田邦夫閣下と面会した際、ベトナム人就労者が日本で生き生きと活躍できるよう配慮してほしいとの要請を受け、その際、同席していた総社市長の片岡聡一氏、アイ・エイチ・ディ協同組合代表理事の小林真弘氏と菅波代表理事が企画し、今回「ベトナム人就労者の健全な受け入れを目指して」をテーマとしてこのシンポジウムを開催。

当日は駐日ベトナム社会主義共和国特命全権大使のヴー・ホン・ナム閣下が日越友好のために望むこととして、「ベトナム人は勤勉で明るい。技能実習生は日本で仕事のスキルやマナーを学び、帰国後に生かしてほしい。日本の文化を持ち帰ってほしい。両国間で「家族」のような関係が定着し、友好関係がさらに深まることを願っている。」と語った。更に、両国の医療、行政、教育、団体・企業関係者やベトナム人技能実習生らが出席。菅波代表理事より、在岡ベトナム人技能実習生をコミュニティと、医療面を支える「岡山・ベトナム健康増進コミュニティ形成推進プログラム」を提案、世話人会が発足された。



## グローバル人材育成事業

### ■AMDA 中学高校生会

#### 概要

◇実施場所 国内：岡山県岡山市、赤磐市、高知県黒潮町 国外：スリランカ

◇実施期間 1995年～継続中

◇事業内容

AMDA 中学高校生会 (以下、中高生会) は県内の中学生、高校生 28 人、他府県から 4 人合計 32 人のメンバーで活動している。国際協力や災害・防災をテーマに毎月 1 回以上の定例会を持ち、テーマに向け活動の目的、内容、準備の話し合いや作業、活動終了後は報告と振り返りを行っている。今年度の主な活動は以下のとおり。

- ① AMDA スリランカ紛争後復興支援平和構築プログラム青少年交流事業
- ② 高知県黒潮町中学生高校生との防災教育取り組み交流会

① AMDA スリランカ紛争後復興支援平和構築プログラム青少年交流事業

◇実施場所 スリランカ・ポロンナルワ

◇実施期間 2018年8月3日～5日

◇参加者数 (中高生会より) 4人

◇参加者の声

・「日本人の本当の役割は、ただ交流をするだけでなくスリランカ国内の民族同士の子どもたちを繋ぐ橋を架けること。笑顔だけではなく「言葉の壁」を乗り越え、次のステップに進んでいくために自分達なりの答えを探していきたい。」

・「昨年努力しても 2 つの民族を繋げることができなかったが、今年この流れを変えることができてうれしかった。」

・「民族間、宗教間の差がチラホラ見え、タミル、シンハラの人達の間を埋めるために参加したのに、あまり行動できずにいた自分が今思うとはずかしい。でも全体的にはとても楽しく良い経験となった。」

・「3 日間という短い期間だったのに 1 か月生活したように感じられるくらい充実していた。今まで生きた人生で一番濃く、一番大切な 3 日間になった。笑顔ほど人を癒し幸せにしてくれるものはないと心から思った。ただの笑いではなく人を幸せにする笑顔を探し、笑顔の輪 (和) を広めたいと思う。」

◇事業内容

1983 年に勃発したスリランカの内戦が 2009 年に終戦を迎え、その間 2003 年～2006 年の 3 年間 AMDA は医療平和として異なる民族・宗教の人々に平等に巡回診療や健康教育を行った。2011 年から医療和平Ⅱとして活動を再開すると並行し、異なる民族、宗教の生徒たちが交流する「平和構築プログラム」を実施、中高生会は 2015 年度から参加している。2018 年は 8 月 3 日～5 日にスリランカ・ポロンナルワで開催し、赤磐市中学生、

広島県立誠之館高校の生徒たちと共に中高生会 4 人がこのプログラムに参加した。

今回は事前に「共に平和を考える」をテーマに中高生会の参加者を中心にスリランカでの自分達の役割と活動内容をしっかり話し合った。今自分達は何ができるのか、平和になるためにはどのような取り組みが必要なのかについて真剣なディスカッションを重ねスローガンとして「Share our Smile」を掲げた。

スリランカでは、お互いの宗教 (仏教、ヒンズー教、イスラム教、キリスト教) を知る宗教プログラム、スポーツや文化交流のプログラム以外、「共に平和を考える」こと取り組みとして、参加者全員が各々平和についての思いを絵にし共有する活動、日本からのチームによる平和についてのプレゼンテーション、そして現地で事故が絶えない灌漑用の大きなため池に掲げる「命を大切に」をテーマとしたポスター作成も行った。2泊3日、スリランカの生徒たちと寝食を共にし、相互理解の大切さ、思いやりの心など深く心に刻み、「笑顔の大切さ」を改めて学ぶことができた。



◇帰国後の報告

帰国後の定例会で今回の参加者が報告したところ、「笑顔も大切だけどそれ以上に相手を尊重し自分の意見をジェスチャーできちんと伝えることが大切だと感じた。言葉が伝わらなくてもつながると思う。」「報告を聞き、平和を実現するために大切な事、日本人の役割を深く考えることができた。」「スリランカの人には日本の事が好きで、今後日本とスリランカの関係がもっと深まれば良いと思う。もっとスリランカの歴史を勉強したい。」と報告を聞いたメンバーも自分の思いなどを語った。

また、11月11日には、赤磐市にて開催された「AMDA 赤磐市防災交際フォーラム」の場で、今回参加した中高生会のメンバーたちは、赤磐市中学生、広島県立誠之館高校の生徒たちと一緒にパワーポイントや動画を使用し活動報告を行った。

② 高知県黒潮町中学生高校生との防災教育取り組み交流会

◇開催場所 高知県黒潮町

◇開催日 2018年8月25日

◇参加者数 6人

◇参加者の声

・「黒潮町の防災に対して、中学生や高校生が活動がとてもきめ細かく大変勉強になった。」

・「避難訓練も学校単位でなく地域の中に入り、住民と一緒にやっている。修学旅行でも防災教育を行っているこ

とをすごいと思った。」

・「ハザードマップを生徒たちが地域の住民に配布したり、防災訓練では高齢者に対して必要に応じお手伝いをしていることを聞き、勉強になった。」

・「故郷を愛し地域住民と共に犠牲者0を目指し、災害に立ち向かおうとしている中学生や高校生の意識の高さがすばらしいと感じた。」

#### ◇事業内容

AMDA と黒潮町が南海トラフ災害に備え、連携協定を締結したのをきっかけに8月25日、中高生会6人が黒潮町を訪れ交流会を開催した。黒潮町にある高知県立大方高校で、中高生会、大方高校、黒潮町立佐賀中学校、大方中学校の参加でそれぞれ防災に対する取り組みを発表した。中高生会からはスリランカ平和構築プログラムの活動紹介に加え7月に発生した西日本豪雨災害でのボランティア活動を中心



に防災に対するの自分達の考えを発表した。黒潮町の中学生高校生は避難訓練、防災教育の発表後大方高校が作成したHUG(避難所運営訓練のロールプレイ)を使いグループワークを実施した。

#### ◇定例会での報告

交流会後の定例会で参加者はメンバーに報告を行った。報告を聞いたメンバーたちからは、「黒潮の防災マップはきめ細かく、地域の人との関わりがすごいと感じた。」「岡山の自分達も意識を高くしたい。今すぐに行動しないといけない。」「中学生や高校生の活動を同世代だけでなく、大人に働きかけることも大切と感じた。」などの声が聞かれた。

### ■ TAPP: シンガポール国立大学の医学生、ネパール・トリブバン大学教育病院での研修

#### ◇実施場所

ネパール・カトマンズ トリブバン大学教育病院

#### ◇実施期間

2018年5月14日～6月13日

#### ◇派遣者

アルチャナ・シュレスタ・ジョシ/調整員/AMDA本部職員

#### ◇現地での参加者を含めた事業チーム構成

AMDA本部、トリブバン大学教育病院、AMDAネパール支部

#### ◇受益者数

シンガポール国立大学医学生9人

#### ◇受益者の声

・「病院の医師や現地の医学生は私たちの前では必ず英語で会話し、話の内容を理解できるように気を配ってくだ



さった。現地の医学生はテストがあるにも関わらず私たちと一緒に時間を過ごしてくれたり、いつも歓迎されているように感じる事ができてとても嬉しかった。」

・「言葉が通じない患者さんたちも、僕に優しく接してくれて、初めて言語を超えたコミュニケーションを取ることができて感動した。」

#### ◇事業内容

AMDA は次世代の育成のために「トリプルAパートナーシップ・プログラム(以下、TAPP)」を開始した。TAPPは、AMDA、AMSA(アジア医学生連絡協議会)、AMSA Alumni(卒業生部会)の三者が協力し、主にAMSAメンバーである医学生が将来、自国のみならず海外において医療を通じて世界平和に貢献できる人材となるよう育成を目指すプログラムである。

2018年度はその一環として、5月中旬より1か月間、シンガポール国立大学医学生9人がネパール・トリブバン大学教育病院(TUTH)とAMDAダマック病院で研修プログラムを受講した。医学生たちは最新の医療機器が整っているシンガポール国内で医療に関わっており、ネパールの医療システムや医療機器の違いに少し驚いたが、「医療従事者として患者に対する思いやりや関わり方、そして患者さんの早期回復を願う気持ちは国境を越えて変わらないと共感した。」と述べた。

今回受け入れたトリブバン大学教育病院の外科部長は、「トリブバン大学教育病院は国内でもある程度医療機器が揃っている総合病院で、私立病院に比べて治療費用が比較的安いいため全国から患者が殺到する。患者や患者の家族で溢れている状況の中で診療することはシンガポールでは考えられないと思うが、研修に来た医学生たちがこの病院での経験を活かして、どこでも医師として患者の治療ができるようになれば効果は大きくなると思う。」と語った。また、現地の医学生も「今回のシンガポールからの医学生との交流でお互い学べる事が多くあり、視野が広がった。」と述べるなど、両国の医学生にとって良き刺激と学びとなった。

### ■ 新庄村中学生大使館訪問

#### ◇実施場所

岡山県新庄村、駐日ネパール連邦民主共和国大使館、駐日インドネシア共和国大使館

#### ◇実施期間

2018年7月29～30日

◇**従事者** 新庄村、新庄村教育委員会、AMDA

◇**受益者** 新庄村立新庄中学校生 5人

◇**事業内容**

大使館に訪問し、大使閣下や担当者の方に英語で出身地の紹介など、コミュニケーションを取ることで、中学生の知識を広げ国際理解を促すため、AMDAが支部を置いている国の在日大使館（駐日ネパール連邦民主共和国大使館、駐日インドネシア共和国大使館）へ新庄村立新庄中学校生5人が訪問した。

大使閣下や担当の方と英語でコミュニケーションを取るために事前学習として、大使館訪問前にAMDA職員が中学校に赴き、訪問する大使館の国についての説明なども実施した。

当日、中学生らは各大使館にて英語で新庄村の紹介をして、お米やジャムなど村の特産品を手渡した。ネパール大使閣下より、「生徒たちによる新庄村の宣伝は素晴らしい。お土産もありがとう。」と感謝を伝えられた。また、インドネシア大使館の教育担当の方は、「日本の田舎には今まで行く機会がなかったが、説明を聞いて素晴らしさに感動した。日本の田舎に行ってみたくなった。」と語った。

大使館訪問をした中学生らは、「初めはとても緊張したが、大使館の方が明るくて、緊張が解けた。」「大使館で新庄村の発表ができてよかった。このことは忘れないだろう。」「ネパールとインドネシアのことを色々知れた。今回学んだことを将来に生かしたい。」などと感想を述べた。

## ■インターンシップ受け入れ：佐藤 未来さん

◇**実施場所** AMDA本部

◇**実施期間** 2019年1月21日～3月22日

◇**期間中の業務内容**

駐日外国公館への提言書作成、「第1回日越国際シンポジウム」の司会進行、その他会計書類作成や備品整理など

◇**事業内容**

教育事業の一環として、AMDA本部にて1人のインターンシップを受け入れた。大学を卒業したばかりの佐藤さんは、途上国の公衆衛生分野の協力に関心があったこと、そして地元岡山から社会に還元できることはないかという思いから就職するまでの間、インターンとして活動した。



佐藤さん（左）

会計などの書類作成、備品整理など本部業務も多くこなす一方、ルワンダ大使館への母子健康手帳の重要性に

関する提言書作成、日本に住むベトナム人と日本社会での共生について話し合う場となった「第1回日越国際シンポジウム」の司会進行など、様々な業務に携わった。

また、初めて佐藤さんがAMDA事務所を訪れた日がちょうどインドネシア津波災害の緊急支援活動にAMDAから調整員を派遣する時であり、事務所で調整する職員たちを見て、「本当に支援を必要としている人たちに迅速に支援を届けるためには、問題の原因は何であるのか、先で何が必要なのかを想定し、関わる人たちを巻き込みながら、細やかな調整を進めることの重要性を学んだ。」と後で語った。加えて、「業務の中で、他団体との連携を取りながら業務をこなす先輩方を見て、このような調整力を今後身につけていきたい。今後AMDAと協働する機会があることを願い、日々精進していきたいと思う。短い間でしたが、本当にありがとうございました。」と話した。

## ■こども食堂支援プラットフォーム

**概要**

◇**実施場所** 岡山県内

◇**実施期間** 通年実施

◇**事業内容**

2017年12月に産官学民で組織する「AMDAこども食堂支援プラットフォーム」を結成した。こども食堂への支援は食材提供だけでなく、子どもたちが将来社会参加できる機会と社会から必要とされる環境を整える活動を目指している。県内のこども食堂は40～50団体とされているが、事業の一環として具体的には、こども食堂の運営に取り組む希望の団体へ次のような支援活動を行った。

- ①お米配布
- ②弘前産リンゴ贈呈
- ③イチゴ狩り農業体験

①お米配布

◇**実施場所**

AMDA本部事務所  
(岡山市北区)

◇**実施日**

年4回(2018年6月12日、9月13日、12月6日、2019年3月14日)

◇**受益者数** 10団体、延べ435人

◇**事業内容**

「こども食堂」の運営に取り組む10の団体に食材支援として年4回(6月、9月、12月、3月)合計880kgのお米を配布した。受け取られた方から「経費のやりく





りが大変なので主食の支援はありがたい。」「おいしい。」などの感想をいただいた。

### ②弘前産リンゴ贈呈

◇実施場所 贈呈式：岡山県司法書士会館（岡山市北区）

贈呈：AMDA 本部事務所（岡山市北区）

◇実施日 贈呈式：2019年1月9日

贈呈：2019年1月17日、18日

◇贈呈式参加者 7人

◇受益者 14団体、180人

#### ◇事業内容

岡山ハーモニーライオンズクラブよりAMDA こども食堂支援プラットフォームを通して弘前リンゴの贈呈を受け1月9日贈呈式を実施、



同月17日、18日にプラットフォームより希望の14団体へ配布した。リンゴの支援について「フルーツは高価なのでありがたい。」「普段、提供できないのでうれしい。」等の声をいただき大変喜んでいただいた。こども達からお礼の手紙や絵を準備され同ライオンズクラブへ届けた。

### ③イチゴ狩り農業体験

◇実施場所 岡山フルーツ農園（岡山市東区）

◇実施日 2019年3月26日

◇参加者数 5団体28人

#### ◇事業内容

3月にこども食堂のこどもたちを対象にイチゴ狩りを実施、当日は5団体28人（保護者11人含む）が参加した。このイベントは楽しく視野を広めることで将来を担う子どもの健全育成を目指す狙いで計画され、当日は岡山県立大学、川崎医療福祉大学の学生さん12人がボランティアとしてスタッフと共に子どもたちのフォローにあたった。

参加した人たちからは「イチゴはみんな好き。AMDAは国内外へ医師らを派遣するなど忙しい中、子どもが喜ぶ催しをしていただき感謝している。」「イチゴの栽培など



を聞いて農家の方の大変さがよく分かった。これまで野菜や果物などを何気なく食べていたが、これからは感謝の気持ちを忘れないようにしたい。」という声が聞かれた。

ボランティアとして参加した学生の方たちからも、「子どもと接する機会があまりなかったので思ったことを正直に話す子どもに驚くと共に勉強になった。イチゴを食べる子どもの表情から満足感が伝わり、すごく楽しかった。」「子どもと一緒にイチゴを食べることで双方の距離間が縮まったのがうれしかった。親と交流できたことも勉強になった。今後もこんな機会があればぜひ参加したい。」などの感想をいただいた。

## 生活支援

### 有機農業事業

#### ■ AMDA フードプログラム

##### 概要

##### ◇実施場所

岡山県真庭郡新庄村、インドネシア・マリノ村

◇実施期間 2012年4月1日～継続中

##### ◇事業内容

「食は命の源」をコンセプトに、アジアに有機農業を普及することを目的としたAMDA フードプログラムを2012年より開始している。同年度より岡山県真庭郡新庄村の野土路地区に農場を開設、アヒルを使った無農薬有機稲作栽培を中心とした農業を行っている。同時に、インドネシア・マリノ村でも有機農業を実施している。



## その他

### ① AMDA 連携野土路農場

◇実施場所 岡山県真庭郡新庄村

◇実施期間 2012年4月1日～継続中

◇従事者(2018年度)

アロイシウス・シタミ/AMDA 連携野土路農場長

◇参加者数(田植え体験) 約20人

◇事業内容

2012年のAMDA野土路農場(現AMDA連携野土路農場)開設以降、アヒルを使って無農薬でコシヒカリやヒメノモチ、野菜を栽培している。

今年度は6月2日に田植え体験を開催、地元農家をはじめ岡山市、玉野市などから約20人が参加。昔ながらの手植え及び害虫駆除に役立つ生後15日程度のアヒルの放鳥を行った。「田植えは楽しく、夢中になって時間の経つのを忘れた。」との声があった。

また、収穫の時期に合わせて9月29日にAMDA感謝祭と題し、収穫体験のほか炊き出しやバンド演奏、様々な国の踊りなどを企画、新庄村の方々と協力し準備を進めた。90人以上が参加する予定だったが、台風24号の接近に伴い2日前に中止を決定した。

また、AMDAは毎年プロジェクト関係国の在日公館を表敬訪問し、野土路農場で収穫した米を贈呈しているが、今年は不作であったため、代わりにAMDAフードプログラムが目指す米として同じ野土路地区の無農薬米を贈呈した。有機米を贈呈したネパール大使閣下は、「お米は大使館のみんなで食べました。とても評判が良かったです。」と述べた。

### ② AMDA マリノ農場

◇実施場所 インドネシア・マリノ村

◇実施期間 2014年～継続中

◇従事者(2018年度)アラニ・アクバル・ファクリ/AMDAインドネシア支部

◇派遣者(2018年度)神倉裕太郎/調整員/AMDA本部職員

◇事業内容

2013年に野土路農場にて受け入れたインドネシアからの研修生イカワティ氏が、新庄村で研修を受けた後、彼女の故郷であるゴワ県マリノ村にて、現在も有機農業を継続している。マリノ農場での有機農業の他、地元農家への有機農業普及を進めており、有機農業実施農家は、2019年3月時点で10数軒を数えた。現地スタッフは、マリノ村の有機米を都市部への販路拡大に向けて尽力している。現地スタッフの一人であるアクバル氏は、「今年度、新たな販路が見つかった。これを機に、もっと有機米を手にする人が増えれば。」と語った。

また、AMDA職員1名も2019年1月に現地に赴き、マリノ農場や現地の市場状況を視察した。

### ■インド・ビハール州ブダガヤにおける井戸建設事業

◇実施場所 インド・ビハール州ブダガヤ地区

◇実施期間 2018年11月～2019年3月13日

◇派遣者 菅波茂/医師/AMDA国際代表、岩尾智子/看護師(米国資格)・調整員/AMDA本部職員

◇現地での参加者を含めた事業チーム構成

AMDA本部、エコラス・デ・ラ・テレ福祉団体、ヴェーダ・マザーテレサ福祉信託財団、日本インド友好医療センター信託財団

◇受益者数 25世帯135人

◇受益者の声

「10年前には乾季でも十分な水位があった井戸も、現在では雨季に十分な雨量がないため乾季には井戸が枯れてしまう。飲料水の確保でさえ問題になることもある。だからこの井戸建設支援に私を含め村人は皆喜んでいて。ご支援いただきありがたい。」

◇事業内容

インドの中で貧困率の高いビハール州ブダガヤ地区でAMDAは母子保健事業を継続的に行っている。この地区にはいくつもの村があり、今回井戸支援を行ったマティヤニ村ダンプールもそのうちの1つ。

AMDA関連団体である日本インド友好医療センター信託財団が活動拠点とする場所から1番近い村でもある。

現地協力団体であるエコラス・デ・ラ・テレ福祉財団のラジェッシュ事務局長から、「乾季になると、村にある公共の井戸水が枯れてしまうため、40度以上の灼熱の中、水瓶を持って周辺の村まで井戸水を汲みに行かなければならず困っている。」と相談を受け、AMDAはラジェッシュ氏と元AMDAピースクリニック職員で、ヴェーダ・マザーテレサ福祉信託財団設立者であるヴェーダ氏と村を訪問、村人と面会した。多くの村人が小作や建設の日雇い労働で生活しており、経済的に新たな井戸を自分たちで建設することが難しい状況を目の当たりにした。この緊迫した状況を確認し、井戸建設支援を決定した。

2019年3月13日、村人が集まって井戸建設の完成を祝った。この井戸は、生活用水と農業用水どちらにも



使用可能。井戸の維持管理のため、洗濯、食器の洗い物などの生活用水は無料、一方、農業用水に関しては農作物を売って収入を得られることから、水道代を徴収し、村のリーダーが管理することになった。

## ■インド・ビハール州ブッダガヤで衣類を配布

◇実施場所 インド・ビハール州ブッダガヤ地区

◇実施期間 夏服配布：2018年6月14日～16日  
冬服配布：11月15～17日

◇派遣者 菅波茂／医師／AMDA インターナショナル代表、難波妙／調整員／AMDA GPSP 支援局長、岩尾智子／看護師（米国資格）・調整員／AMDA 本部職員

◇現地での参加者を含めた事業チーム構成

AMDA 本部、天理教岡山教区国際救済委員会、日本インド友好医療センター信託財団、ジーナアミタツブ福祉信託財団、エコラス・デ・ラ・テレ福祉団体、ヴェーダ・マザーテレサ福祉信託財団

◇受益者数 延べ1,299人

◇受益者の声

・「日本の人が私たちに服を送ってくださったと聞いた。日本について今は知らないことが多いけれど、日本のことをもっと学んで服を送ってくださった日本人といつか会いたい。ブッダガヤにいながら日本の服を着ることができてうれしい。この服、かわいいでしょう？服を届けてくれて、ありがとう。」

・「服をありがとう。冬服は身体が温かくなる。自分や家族が持っている服も古くなっていたり、服の種類によっては元々ブッダガヤでは手に入らなかったりするので助かる。大切に使う。」

◇事業内容

天理教岡山教区国際救済委員会より夏用・冬用の衣類など合計322箱の段ボールをインドにお送り



りいただいた。服を配布したのはAMDAが母子保健事業を行っているビハール州ブッダガヤ地区。

AMDAは、夏用の衣類を6月に、冬用の衣類を11月に現地協力団体と一緒にビハール州ブッダガヤ地区内の地域、学校及びAMDAピースクリニックの計9か所で配布した。服を受け取った人たちの中には、配布された服を身体にあててサイズを確かめたり、中にはその場で試着している人たちもいた。

## ■インド・ブッダガヤ地区ロータリークラブと協働でヘルメットを配布

◇実施場所 インド・ビハール州ブッダガヤ地区

◇実施日 2018年6月18日

◇派遣者 菅波茂／医師／AMDA インターナショナル代表、岩尾智子／看護師（米国資格）・調整員／AMDA 本部職員

◇現地での参加者を含めた事業チーム構成

AMDA 本部、ブッダガヤ地区ロータリークラブ

◇受益者数 45人



◇事業内容

2018年6月18日、AMDAはブッダガヤ地区ロータリークラブと協働で、ブッダガヤ在住のオートバイ使用者45人に先着順でヘルメットを配布した。ヘルメットを受け取った男性は、「ヘルメットを贈呈してもらえてうれしい。このヘルメットは自分を守ってくれるし、ひいては家族を守ることににもなる。大切にしたい。」と話した。

この配布から5か月後に岩尾調整員が再度同地区を訪れた際、ヘルメットを受け取った青年から「あの時、AMDAとブッダガヤ地区ロータリークラブからヘルメットをもらった。今でも大切に使っている。ありがとう。」と話しかけられ、啓発活動による影響力の大きさを実感した。

この事業は、ブッダガヤ地区警察よりブッダガヤ地区ロータリークラブに「同地区でオートバイ事故が多発していることから、交通事故防止啓発活動の一環として、ヘルメットを配布してもらえないか。」との話を受け、ロータリークラブがAMDAに相談。ヘルメットにかかる費用を半分ずつ出し合い、協働でヘルメットを配布することとなった。

AMDAは同事業で一緒に活動したブッダガヤ地区ロータリークラブと、2018年11月17日に協力協定を締結。今後も、災害時などに協力して活動していく。

## 連携協力協定調印

### ■国内連携協力協定調印

・公益財団法人国際医療技術財団、公益社団法人全日本鍼灸マッサージ師会（三者協定）	10月14日
・さめじま病院	2月1日
・熊本県上益城郡益城町	2月12日
・組合立諏訪中央病院	2月14日
・学校法人平成医療学園宝塚医療大学	3月25日

### ■海外連携協力協定調印

・ネパール・自立生活センターラリトプール	9月11日
・モンゴル・モンゴル再生医療センター（RMC）	10月9日
・スリランカ・スリランカ国民統一と和解委員会	10月18日
・インド・ブッダガヤ地区ロータリークラブ	11月17日
・アメリカ・非営利公益法人国際 KIF	12月1日
・バングラデシュ・テンガマラ婦人会（TMSS）、バングラデシュ・ダウン症協会（三者協定）	1月7日

## 特定非営利活動法人アムダ（AMDA）団体概要

所在地	〒700-0013 岡山県岡山市北区伊福町3丁目31-1	
設立年月日	1984年8月 国連経済社会理事会「総合協議資格」取得 2006年 認定 NPO 法人に認証 2013年5月8日付	
AMDA グループ構成団体	特定非営利活動法人アムダ：AMDA AMDA インターナショナル（任意団体） 特定非営利活動法人 AMDA 社会開発機構 特定非営利活動法人 AMDA 国際医療情報センター アムダ兵庫（任意団体）	
海外活動	緊急医療支援、難民医療支援、復興支援、合同医療ミッション、スポーツ親善交流、 フードプログラム、ASMP、セミナー開催等	
活動国	日本、ネパール、インドネシア、ハイチ、モンゴル、インド、ルワンダ、スリランカ、 フィリピン、バングラデシュ、カンボジア 他	
国内活動	復興支援、フードプログラム、こども食堂支援、出張講演、 大学講義受託、活動報告会・セミナー開催、 AMDA 中学高校生会、イベント参加、 南海トラフ災害対応医療チーム派遣準備 等	
AMDA 支部	沖縄支部、神奈川支部	
AMDA クラブ	大槌、鎌倉、高知、玉野、福山、竹原、神女（神戸女子大学）各クラブ	
スタッフ	常勤8人 非常勤5人 出向1人 派遣2人	
会員数	745人	
ER ネットワーク登録数	555人	2019年7月1日現在

## 特定非営利活動法人 アムダ（AMDA）役員

理事長	菅波 茂	医師 AMDA グループ代表
副理事長	菅波 知子	医師
理事	大土 吉子	元岡山県生活環境政策スタッフ
理事	佐藤 拓史	医師 東亜大学医療学部教授 モンゴル国立医科大学招聘教授
理事	中西 泉	医師 医療法人社団慶泉会町谷原病院 理事長
理事	難波 妙	特定非営利活動法人アムダ G P S P 支援局長
理事	難波比加理	特定非営利活動法人アムダ 財務部長
理事	野島 治	元倉敷市教育委員会 嘱託啓発指導員・小学校校長
監事	渡丸 弘之	公認会計士

（理事名 五十音順）

2019年7月1日現在

## 国内の動き

### ■大学・専門学校等講義

福山大学、新見公立大学、岡山医療福祉専門学校、旭川荘厚生専門学院、神戸大学、岡山大学、大学コンソーシアム岡山、岡山県立大学大学院、山陽学園大学、相生市看護専門学校、順正高等看護専門学校、玉野総合医療専門学校、福山市医師会看護専門学校

### ■講演

旅の文化研究所、日本栄養・食糧学会大会、岡山県立瀬戸南高等学校、吉備中央町国際化推進協会、岡山市東区役所千種学区安全・安心ネットワーク、岡山県立津山東高等学校、吉備高原学園高等学校、有限会社照泰仏堂、倉敷市立大高小学校、岡山県立岡山城東高等学校、岡山県立玉島高等学校、奈義町教育委員会、金光学園中学校、総社市文化協会、特定非営利活動法人こくさいこどもフォーラム岡山、福山市立神辺小学校、福田公民館、岡山県立真庭高等学校、備前ロータリークラブ、玉野市立東見中学校、岡山県立岡山操山高等学校、玉野市立日比中学校、岡山県立岡山操山中学校、おかやまコープ備北エリア、岡山県立倉敷中央高等学校、岡山市立平津小学校、岡山市立石井小学校（講演時系列）

### ■研修受け入れ

- ・バトラフ・ムンフバヤル医師  
（平成 30 年度の岡山県国際貢献ローカル・トゥ・ローカル技術移転事業でモンゴルより招聘）
- ・ビム・ダマラ氏  
（ネパール・AMDА ダマック病院事務局長が岡山県、徳島県内の医療機関にて研修）
- ・ズオン・ホアン・ミン医師、グエン・ヴァン・マイン医師  
（ベトナム国防省軍 175 病院から協力協定先医療機関への研修受け入れ調整）

### ■インターンシップ受け入れ

- ・佐藤未来さん 2019年1月21日～3月22日

### ■主催イベント

- ・第2回 AMDА・赤磐市防災国際フォーラム 5月12日
- ・まちかどトーク / 街頭募金 5月12日、6月22日、7月17日、9月18日、10月2日、10月5日、2019年1月9日
- ・第3回 AMDА・赤磐市防災国際フォーラム 11月11日
- ・第5回 AMDА 災害鍼灸チーム育成プログラム 11月23、24日
- ・第5回 AMDА 南海トラフ災害対応プラットフォーム調整会議 11月24日
- ・第5回被災地間交流フォーラム 2月17日
- ・こども食堂支援 イチゴ狩り農業体験 3月26日

### ■主な参加イベント

- ・AMDА 連携野土路農場で田植え体験 6月2日
- ・陸上自衛隊国際緊急援助隊訓練 6月26日
- ・コープフェスタ 2018 9月22日
- ・和気ものづくりフェスタ大国家住宅会場パネル展 9月29日
- ・一宮わくわくワークふれあい広場 11月18日
- ・平成 30 年神辺本陣祭り 11月18日
- ・赤磐市防災訓練（パネル展示など） 11月25日
- ・平成 30 年度全日本病院協会救急災害訓練 1月19日
- ・歴史から学ぶ防災シンポジウム in 東区 1月26日
- ・第 62 回洋蘭展（パネル展示） 2月1～3日
- ・第 1 回日越国際シンポジウム 2月20日
- ・倉敷アカデミックウインズ「第 270 回定期演奏会」 3月3日
- ・AMDА 鎌倉クラブチャリティコンサート 11月25日
- ・東日本復興支援チャリティー -from bizen- 3月9日
- ・チャリティーオークション「倉敷からの風」 3月14～17日

## 活動計算書

平成30年4月1日から平成31年3月31日まで

特定非営利活動法人 アムダ  
(単位：円)

科 目	金 額	
I 経常収益		
1. 受取会費		
正会員受取会費	420,000	
医師会員受取会費	960,000	
一般会員受取会費	3,880,000	
学生会員受取会費	27,000	
法人会員受取会費	1,080,000	
賛助会員受取会費	460,000	6,827,000
2. 受取寄附金		
受取寄附金	78,285,431	78,285,431
3. 受取助成金等		
受取民間助成金	845,764	
受取地方公共団体補助金	250,000	1,095,764
4. 事業収益		
事業収益	434,132	434,132
5. その他収益		
受取利息	97,130	
為替差益	2,102,321	
雑収益	15,000	2,214,451
経常収益計		88,856,778
II 経常費用		
1. 事業費		
(1) 人件費		
給料手当	27,189,224	
法定福利費	3,911,643	
福利厚生費	906,690	
派遣費	5,689,672	
人件費計	37,697,229	
(2) その他経費		
業務委託費	15,776,120	
諸謝金	83,409	
印刷製本費	2,562,997	
会議費	1,216,906	
旅費交通費	20,847,022	
通信運搬費	5,042,908	
消耗品費	4,596,296	
渉外費	1,080,653	
修繕費	189,723	
水道光熱費	401,332	
地代家賃	1,787,372	
賃借料	5,685,603	
減価償却費	1,353,218	
保険料	1,118,357	
諸会費	12,000	
租税公課	10,940	
研修費	82,110	
支払手数料	901,330	
支払義援金	635,368	
為替差損	120,509	
新聞図書費	9,313	
燃料費	831,566	

科 目	金 額	
医療消耗品費	5,770,768	
栄養給食費	1,969,375	
雑費	505,330	
その他経費計	72,590,525	
事業費計		110,287,754
2. 管理費		
(1) 人件費		
給料手当	4,615,313	
法定福利費	784,528	
福利厚生費	699,917	
派遣費	1,193,230	
人件費計	7,292,988	
(2) その他経費		
業務委託費	1,231,200	
印刷製本費	177,392	
会議費	51,944	
旅費交通費	267,904	
通信運搬費	1,000,695	
消耗品費	1,135,537	
渉外費	139,180	
修繕費	93,950	
水道光熱費	233,175	
賃借料	2,426,249	
減価償却費	537,780	
保険料	140,350	
諸会費	10,000	
租税公課	99,220	
支払手数料	731,166	
新聞図書費	37,116	
燃料費	125,042	
雑費	70,820	
その他経費計	8,508,720	
管理費計		15,801,708
経常費用計		126,089,462
当期経常増減額		△ 37,232,684
Ⅲ 経常外収益		
経常外収益計		0
Ⅳ 経常外費用		
1. 過年度損益修正損		
過年度損益修正損	541,793	541,793
経常外費用計		541,793
税引前当期正味財産増減額		△ 37,774,477
当期正味財産増減額		△ 37,774,477
前期繰越正味財産額		466,481,054
次期繰越正味財産額		428,706,577

## 貸借対照表

平成31年3月31日現在

特定非営利活動法人 アムダ

(単位:円)

科 目	金 額		
I 資産の部			
1. 流動資産			
現金預金	332,612,064		
未収会費	60,000		
未収金	250,000		
棚卸資産	3,548,712		
前払金	125,000		
前払費用	494,280		
仮払金	3,188,382		
流動資産合計		340,278,438	
2. 固定資産			
(1) 有形固定資産			
建物	5,971,662		
車両運搬具	2,027,764		
什器備品	4,041,921		
建物附属設備	719,250		
一括償却資産	1,625,380		
減価償却累計額	△ 7,072,273		
有形固定資産計	7,313,704		
(2) 無形固定資産			
無形固定資産計	0		
(3) 投資その他の資産			
リサイクル預託金	19,530		
敷金	60,000		
差入保証金	16,000		
東日本震災特定預金	53,532,019		
東日本奨学特定預金	351,569		
プロジェクト準備金	32,172,696		
投資その他の資産計	86,151,814		
固定資産合計		93,465,518	
資産合計			433,743,956
II 負債の部			
1. 流動負債			
未払金	4,636,722		
預り金	400,657		
流動負債合計		5,037,379	
2. 固定負債			
固定負債合計		0	
負債合計			5,037,379
III 正味財産の部			
前期繰越正味財産		466,481,054	
当期正味財産増減額		△ 37,774,477	
正味財産合計			428,706,577
負債及び正味財産合計			433,743,956



# 財産目録

平成31年 3月31日現在

特定非営利活動法人 アムダ

(単位：円)

科 目		金 額	
I 資産の部			
1. 流動資産			
現金預金			
	現金	6,254,363	
	普通預金	267,945,834	
	定期預金	10,000,000	
	外貨預金	48,411,867	
未収会費		60,000	
未収金		250,000	
棚卸資産		3,548,712	
前払金	印刷製本費	125,000	
前払費用	渉外費	6,000	
	賃借料	488,280	
仮払金	東日本その他海外事業	3,188,382	
流動資産合計			340,278,438
2. 固定資産			
(1) 有形固定資産			
建物		5,971,662	
車両運搬具		2,027,764	
什器備品		4,041,921	
建物附属設備		719,250	
一括償却資産		1,625,380	
減価償却累計額		△ 7,072,273	
有形固定資産計		7,313,704	
(2) 無形固定資産			
無形固定資産計		0	
(3) 投資その他の資産			
リサイクル預託金		19,530	
敷金		60,000	
差入保証金		16,000	
東日本震災特定預金		53,532,019	
東日本奨学特定預金		351,569	
プロジェクト準備金		32,172,696	
投資その他の資産計		86,151,814	
固定資産合計			93,465,518
資産合計			433,743,956
II 負債の部			
1. 流動負債			
未払金			
	給与	2,557,255	
	法定福利費	698,721	
	福利厚生費	138,281	
	派遣費	349,272	
	業務委託費	240,000	
	旅費交通費	197,620	
	通信運搬費	349,715	
	消耗品費	47,805	
	渉外費	12,828	
	賃借料	21,448	
	保険料	6,160	
	栄養給食費	17,617	
預り金		400,657	
流動負債合計			5,037,379
2. 固定負債			
固定負債合計			0
負債合計			5,037,379
正味財産			428,706,577



3. 使途が制約された寄附金等の内訳  
 使途が制約された寄附金等の内訳（正味財産の増減及び残高の状況）は以下の通りです。  
 当法人の正味財産は428,706,577円ですが、そのうち86,056,284円は使途が特定されています。  
 したがって使途が制約されていない正味財産は342,650,293円です。

(単位：円)

内 容	期首残高	当期増加額	当期減少額	期末残高	備 考
緊急人道支援事業	8,508,590	36,251,028	59,460,306	0	国内外で起こる緊急人道支援事業に使用しました
東日本支援事業	67,113,303	1,071,046	14,652,330	53,532,019	東日本復興支援事業に使用しました
東日本奨学金事業	442,323	13,754	104,508	351,569	東日本で医療従事者等を目標とする学生の奨学金支援事業奨励金等に使用しました
プロジェクト準備金	33,960,068	0	1,787,372	32,172,696	土地使用料としてインド事業に使用しました (2017年から毎年20年間、取り崩していく計画)
合計	110,024,284	37,335,828	76,004,516	86,056,284	

注① 不足分に関しては一般会計より補填しました

4. 固定資産の増減内訳

(単位：円)

科 目	取得価額	取 得	減 少	期末取得価額	減価償却累計額	期末帳簿価額
有形固定資産						
建物	5,971,662	0	0	5,971,662	1,515,308	4,456,354
建物附属設備	719,250	0	0	719,250	421,654	297,596
車両及び運搬具	2,027,764	0	0	2,027,764	887,915	1,139,849
器具及び備品	5,667,301	※	1,625,380	4,041,921	3,163,810	878,111
一括償却資産	0	※	1,625,380	1,625,380	1,083,586	541,794
投資その他の資産						
リサイクル預託金	19,530	0	0	19,530	-	19,530
敷金	60,000	0	0	60,000	-	60,000
差入保証金	16,000	0	0	16,000	-	16,000
緊急人道支援特定預金	8,508,590	36,251,028	59,460,306	0	0	0
東日本建設特定預金	67,113,303	1,071,046	14,652,330	14,652,330	53,532,019	53,532,019
東日本奨学金特定預金	442,323	13,754	104,508	104,508	351,569	351,569
プロジェクト用特定資産	33,960,068	0	1,787,372	32,172,696	-	32,172,696
合計	124,503,791	38,961,208	77,629,896	100,537,791	7,072,273	93,465,518

5. 借入金の増減内訳

該当ありません。

6. 役員及びその近親者との取引の内訳  
 役員及びその近親者との取引は以下の通りです。

(単位：円)

科 目	計算書類に計上された金額	役員及び近親者との取引
(活動計算書)		
受取寄附金	78,285,431	100,000
貸借料(管理費)	2,420,249	1,635,552
貸借料(事業費)	5,685,603	956,448
活動計算書計 (貸借対照表)	86,397,283	2,692,000
前払費用	494,280	216,000
貸借対照表計	494,280	216,000

7. 事業費と管理費の按分方法

事業本部の共通する経費のうち、従事割合の高い東日本・緊急人道支援事業に関しては給料手当・役員報酬及び法定福利費、水道光熱費、通信運搬費、通信運搬費、賃借料を従事割合に基づいて按分しています。

※前修正として科目振替を行いました。

※前期償却不足と当期二期分の償却を計上しています。



インドネシア津波被災者緊急支援活動

2018年度も国内外で自然災害が多く発生し、10件の支援活動を実施しました。特に7月に発生した西日本豪雨災害では AMDA 本部のある岡山県も被災、AMDA は総社市及び倉敷市真備町で被災された方々や、被災者を支援するボランティアの方々などに医療を含む支援活動を行いました。

この支援活動には、南海トラフ地震・津波が発生した際に被災地にて支援活動を行う自治体、医療機関及び協力団体だけでなく、支援に入る予定の徳島県及び高知県内の自治体や医療機関などからも参加されました。更に、今まで AMDA が一緒に活動を行ってきた国内外の方々も活動地に来ていただくなど、今回の支援活動では特に「相互扶助（困ったときはお互い様）」の重要性を感じました。そして、この支援活動を含め、AMDA の活動がすべて皆様からの温かいご支援ご協力によるものであると痛感し、感謝の気持ちを改めて思った次第です。

今後、南海トラフ災害を含む大規模災害への支援活動に向け、今までの経験や学びを基に準備を進めてまいります。引き続き何卒ご支援をよろしく願いたします。